



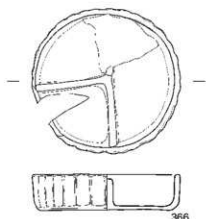
第59圖 II層上面出土遺物6 (陶磁器)



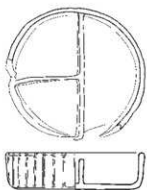
第60図 II層上面出土遺物7 (陶磁器ほか)



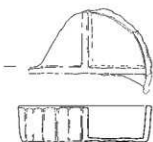
365



366



367



368



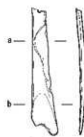
370



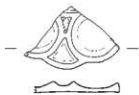
369



372
5D9



376



371



373



374



375

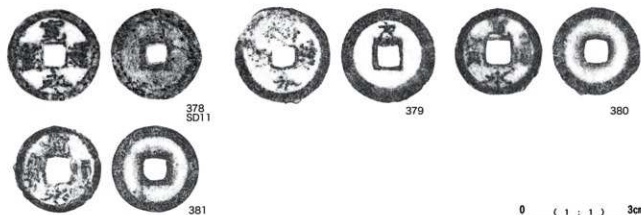


377



0 (1 : 3) 10cm

第61図 II層上面出土遺物8 (陶磁器ほか)



第62図 II層上面出土遺物9(古銭)

荷の大きな栗石を引き詰めた(II層下面で検出)上に、凝灰岩の知業や石列の排水路やモルタル等で建てていたことが確認された。

(1) 遺構(第50～53図, 第7表)

検出された遺構は、凝灰岩のほかモルタルやレンガを使用した建物基礎や排水路であった。調査区西側には南北方向に走る排水路(SR001・003・007)が、調査区東側には東西方向に走る排水路(SM001・004・005)等が検出された。また、南側には凝灰岩の礫を敷き詰めた円形の知業が確認された。これらの遺構は高等学校の校舎に関連するものと考えられる。

平成29年度調査でも、II層上で凝灰岩を密に敷き詰めた学校校舎の基礎と考えられる知業やモルタルやレンガの排水口が全面で確認されており、校舎基礎の広がりや残存状況を確認することができた(第50図)。なお、平成29年度調査の排水溝の埋土には大正14年の桜島大噴火の際の火山灰(P1)が厚く堆積していることが確認されている。

(2) 遺物

276～280は軒丸瓦である。276～279は珠連三巴文である。周縁幅が広く、珠文が大きく多い276、279と珠文が小さく数が少ない277・278がある。後者が古様である。280は花卉装が葉脈状にある牡丹文である。283は文様を持たないもので、19世紀代のものである。281は小菊瓦である。282は鳥伏間瓦で明灰色を呈す。鹿児島城跡の御角櫓出土のものに類似する(鹿理セ2022)。284～286は軒平瓦である。灰色で石英を多く含む胎土で、細線の上向三葉文をもつ。287、288は鎌軒棧瓦である。黒色を呈し、文様幅が狭く、唐草文が一体化した鹿児島式の様式をもつ。289は軒棧瓦で、文様をもたないいわゆる万十軒瓦である。

290～298は丸瓦である。294や296、298は横方向の切り離し痕(コビキB)が明瞭に残る。298は灰色を呈

し、胎土には石英を多く含む。玉縁長が長く、凸面端部を面取りし、断面がやや尖る293や295は面取り面がごく短く断面が丸みを帯び、295は凹面には「平」のスタンプ文をもつ。

299は平瓦、300～302は棧瓦である。299は表面に漆喰が厚く付着している。303は海鼠瓦である。裏面全体に砂と鉄分(マンガン)が付着する。304～306は鬼瓦である。304は鬼板瓦で左右に雲文、中央には宝珠をもつ跨鬼である。宝珠の上部には「吉」のスタンプ文をもつ。文様は異なるが類似したものが鹿児島城跡(御樓門跡南側石垣周辺41T)や鹿児島城二之丸跡でも出土している。306は雲文部分の可能性が考えられる。

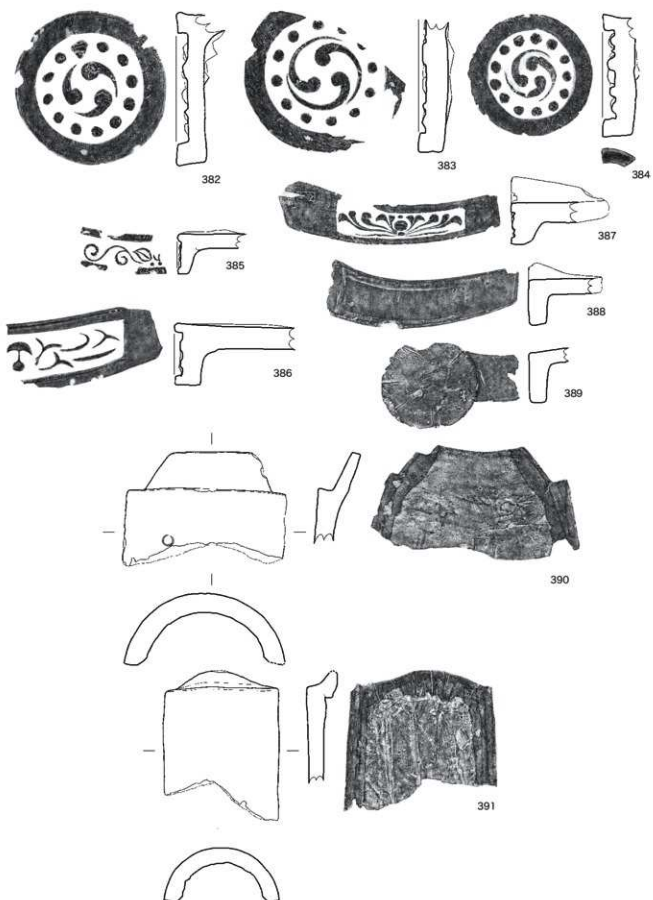
307・308は陶器平瓦である。どちらも二次焼成を受けており、308は凹面に施釉が見られる。

309～320は染付である。309～314は碗で、309・310は薩摩磁器で内面見込み面に虫文がある。315・316は皿である。317は多角形の向付である。318は火入れである。319・320は蓋である。321は赤絵の小壺である。322～324は青磁である。322・324は香炉、323は龍泉窯系青磁碗の底部で、メンコ状に面取りされている。

327～330は堅野系の白胎陶器である。325は碗、326は脚付き碗、327は把手、328は陽刻の花文がつく鉢、329は三島手(象嵌)の小型碗である。330は鉢もしくは壺で底面は露胎する。331は茶船が施釉される茶瓶の注口である。

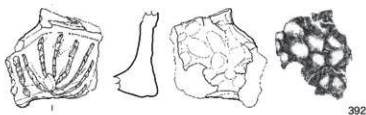
332～342は加治木・始良系の陶器である。332～336は碗で、336以外は蛇の目軸割ぎである。337～339は皿で、内面は砂目をもつ337・338と339は目跡が内意面と底部に残る。340は灯明皿台である。341は完形の水差である。342は鉢である。

343～355は堂平窯・苗代川系の陶器である。343は注口で折り目の接合痕が明瞭に残る。344は鉢である。345・346・348は播鉢で、347は植木鉢である。349～352は甕・鉢である。349は堂平窯の甕である。353は壺、354は徳利である。355は茶瓶の底部である。

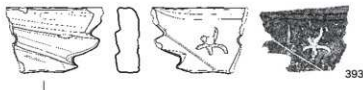


第63图 I层出土遗物1 (瓦)

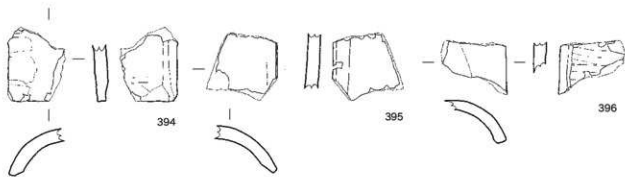
0 (1:4) 10cm



392



393



394

395

396

0 (1:4) 10cm

第64図 1層出土遺物2(瓦)

356は産地不明で、三彩の壺である。357は鉄絵の茶碗である。358は唐津(武雄)の鉢で、白化粧土で文様を施文する。359は沖繩陶器の鉢である。360は中国陶器の四耳壺である。361は備前焼の播鉢である。362・363・365が瓦質土器である。362は茶釜で、363は火鉢である。365は火鉢である。「第七号」の印刻(スタンプ)がある。364は土師器の皿である。

366~369は筆洗である。底面には花文の浮き彫りのもの(366・368・369)や氏名や学年組などが墨書で描かれているものがある(366・367)。370・371はパレットである。372は灰色を呈す頁岩製の硯である。

373・374はガラス瓶である。374は底面に「3」のエンボスがある。374は丸善のインク瓶で、底面に「M」のエンボスがある。375は薬瓶か。376・377は骨角製のへうで、和裁の裁縫道具と考えられる。

378~381は寛永通寶である。379は背面に「文」字がある新寛永である。

3 1層(第63~67図)

地表面の約1m堆積しており、旧検査庁の庁舎基礎や掘乱が多く、コンクリートや礎等が多く含む。本調査では、庁舎基礎等を除去した状態(TP4.0以下の表土除

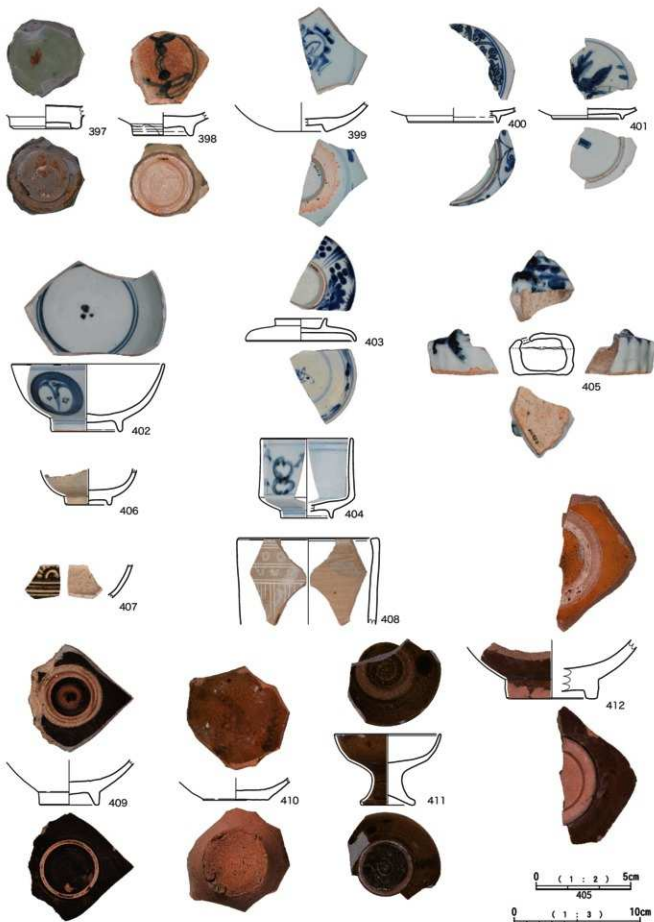
去)から始めたため、除去後の残存していた1層の調査を行った。1層からは近現代~中世までの遺物が出土した。

(1) 遺物

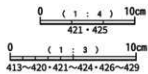
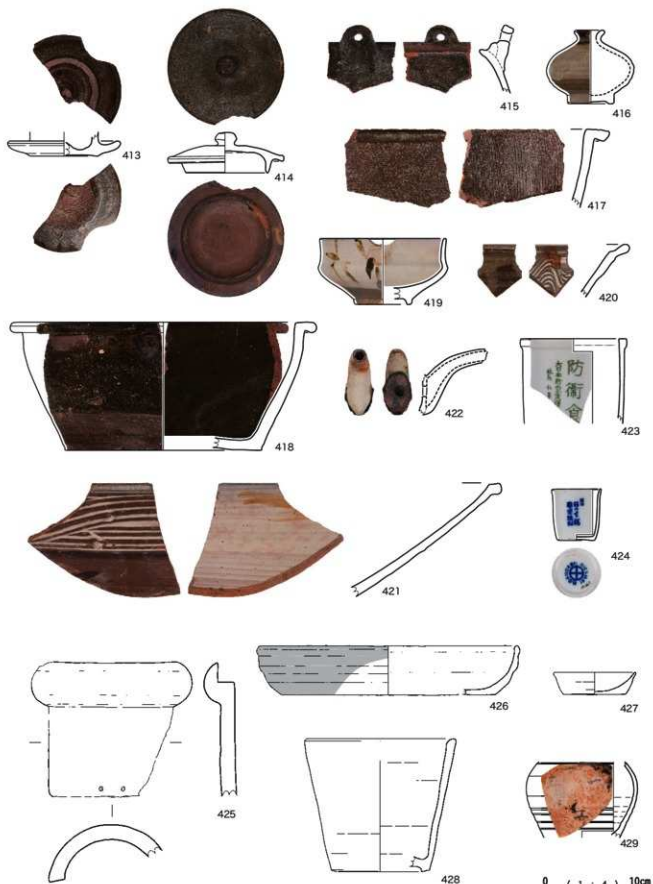
382~384は連珠三巴文の軒丸瓦である。385・386は軒平瓦である。385は細線の上向三葉文で灰色を呈す。386は大型で中央に礎文をもつ。387~389は軒棧瓦である。387は瓦当にはスタンプをもつ。390・391は丸瓦である。392・393は鬼瓦である。392は顎髭の箇所で、内面は指頭圧痕で明瞭に残る。393は橙色を呈し、羽形で裏面には「大」の線刻がある。394~396は陶器丸瓦である。

397は中国青磁碗の高台である。おそらく太宰府II期で、メンコ状に面取りされている。398~401は青花底の皿である。400・401は皿で小野分類のF群に相当する。

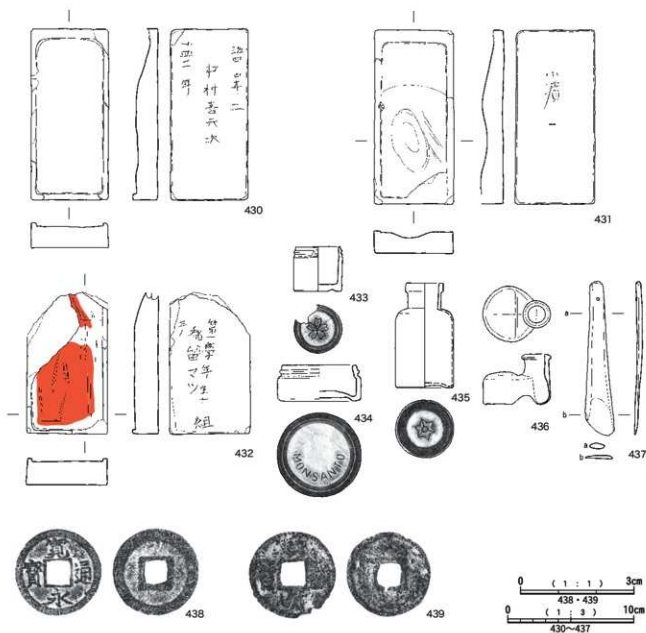
402~405は近世染付である。402は碗で、403は蓋、404は筒形碗である。405は水滴で、半損しているが尻尾の表現がみられることから、動物を模した形であった可能性がある。406は堅野系の白胎陶器の碗である。407は宋胡餅の碗である。408は三島手(象嵌)の筒型



第65圖 I層出土遺物3 (陶磁器)



第66図 Ⅰ層出土遺物4 (陶磁器ほか)



第67図 Ⅰ層出土遺物5 (碗・ガラスなど)

鉢である。

409～413は始良・加治木系の陶器である。409・412は碗である。蛇の目軸剥ぎで、高台内面が施軸する409と412は高台～内面まで露胎する。410は皿で内面には砂目は残る。411は仏飯器である。413は灯明皿台である。414は蓋で、415は茶瓶の摘まみ部分である。

416は小壺の完形品で、白化粧土が胴部上～中位まで施軸する。417は搦鉢である。418は鉢で、419は唐津と思われる茶碗で白化粧土と鉄絵が施される。420・421は鉢である。同一個体の可能性があり、茶褐色の胎土に内面・外面に白化粧土が施軸される。422は沖繩陶器の水差の注口である。

423・424は近現代の磁器である。423は防衛食器で、

424は近現代の遺物で「薩摩本坊台名會社 おはら焼附」と記載がみられる。

425は土管である。426は焙烙、427は土師器皿、428は近代以降の土師質の火入もしくは植木鉢と思われる。429は壺形で外面には学校の組等の墨書がみられる。

430～432は碗で裏面には氏名や組などが彫刻されており、432は朱色の墨痕が残る。433～436はガラス瓶である。434は底面に「MONSANTO」のエンボスがみられる。436はインク瓶である。437は骨角製のヘラで相裁道具と考えられる。

438・439は古銭で寛永通寶である。

第8表 出土遺物観察表1(瓦)

種類	調査・採	種類	器種	高さ	幅	厚さ	瓦目：文様	透気数	瓦目：面積	取付幅	瓦目高	文様高	内径	外径	備考	
23	17	SK27, SK30	瓦	軒丸瓦	-	-	連続三巴文	3	-	1.5	-	-	-	-		
	18	SK45	瓦	軒丸瓦	-	-	連続三巴文	6	-	1.9	-	-	8.3	13.0		
	19	SK20	瓦	軒丸瓦	-	-	連続三巴文	4	-	2.7	-	-	-	-		
	20	SK20	瓦	軒丸瓦	-	-	3.0	連続三巴文	4	-	2.5	-	-	-		
	21	SD11	瓦	軒丸瓦	-	-	-	連続三巴文	3	-	-	-	-	-		
	22	SD11	瓦	軒丸瓦	-	-	2.3	連続三巴文	2	-	2.7	-	-	-		
	23	SK48	瓦	軒丸瓦	-	-	3.1	連続三巴文	3	-	2.9	-	-	-		
	24	V_99	瓦	軒丸瓦	-	-	2.6	連続三巴文	12	18.0	2.2	-	-	8.5	12.8	
	25	V	瓦	軒丸瓦	-	-	-	連続三巴文	3	(10.0)	2.1	-	-	-	-	
	26	V	瓦	軒丸瓦	-	-	2.0	連続三巴文	2	-	2.7	-	-	-		
	27	SD11	瓦	軒丸瓦	-	-	2.7	牡丹文	-	-	3.0	-	-	-		
28	SD11	瓦	軒丸瓦	-	-	2.4	牡丹文	-	-	2.5	-	-	-			
29	SD11	瓦	軒丸瓦	-	-	2.4	牡丹文	-	-	2.7	-	-	(9.2)	(11.0)		
30	SD11	瓦	軒丸瓦	-	-	2.2	牡丹文	-	16.3	2.8	-	-	8.4	10.5		
31	V	瓦	小瓦	-	-	2.7	小堀	-	8.9	0.8	-	-	6.2	7.1		
24	32	SD11	瓦	軒平瓦	-	-	2.0	唐草文(大振置式)	-	-	-	5.3	3.2	-	-	
	33	SD11	瓦	軒平瓦	-	-	1.9	唐草文(大振置式)	-	-	-	5.5	3.3	-	-	
	34	SD11	瓦	軒平瓦	-	-	1.8	唐草文(大振置式)	-	-	-	5.7	3.3	-	-	
	35	SK80	瓦	軒平瓦	-	-	2.0	唐草文(大振置式)	-	-	-	7.0	4.5	-	-	
	36	SK45	瓦	軒平瓦	-	-	1.7	唐草文(大振置式)	-	-	-	7.3	4.8	-	-	
	37	SK20	瓦	軒平瓦	-	-	1.5	下向三葉上下	-	-	-	-	-	-	-	
	38	SK80	瓦	軒平瓦	-	-	-	上向三葉上下	-	-	-	-	-	-	-	
	39	V	瓦	軒椀瓦	-	-	2.0	唐草文(唐瓦島式)	-	-	-	4.3	2.8	-	-	
	40	V	瓦	軒椀瓦	-	-	1.6	唐草文(唐瓦島式)	-	-	-	4.2	2.4	-	-	
	41	SK80	瓦	陶器 軒丸瓦	-	-	-	均整唐草三巴文	-	-	2.6	-	-	-	-	
42	SD11	瓦	陶器丸瓦	(8.9)	(7.0)	1.8	-	-	-	-	-	-	-	-		
43	SD11	瓦	陶器平瓦	(2.8)	(5.7)	1.4	-	-	-	-	-	-	-	-		
44	SK80	瓦	陶器平瓦	(13.2)	-	1.7	-	-	-	-	-	-	-	-	焼付字少タキ	
45	SK80	瓦	陶器丸瓦	(10.9)	(8.7)	1.6	-	-	-	-	-	-	-	-	焼付字少タキ	
46	P63	瓦	陶器平瓦	(17.5)	(16.7)	1.5	-	-	-	-	-	-	-	-	焼付字少タキ	
47	P63	瓦	陶器平瓦	(8.9)	(5.7)	1.6	-	-	-	-	-	-	-	-	焼付字少タキ	
25	48	SD11	瓦	丸瓦	27.4	13.0	2.1	-	-	-	-	-	-	-	コビキ8	
	49	SD11	瓦	丸瓦	(20.8)	18.8	2.3	-	-	-	-	-	-	-	瓦織履	
	50	SD11	瓦	丸瓦	(11.9)	16.6	3.3	-	-	-	-	-	-	-	-	
26	51	SD11	瓦	丸瓦	(18.7)	18.8	2.1	-	-	-	-	-	-	-	瓦織履, 裨杖圧痕	
	52	SK44	瓦	丸瓦	(13.2)	(15.0)	1.9	-	-	-	-	-	-	-	-	
27	53	SK20	瓦	丸瓦	(16.9)	18.0	2.5	-	-	-	-	-	-	-	-	
	54	SK85	瓦	丸瓦	(15.7)	(9.3)	1.3	-	-	-	-	-	-	-	-	
	55	SK82	瓦	丸瓦	(15.7)	(7.7)	1.7	-	-	-	-	-	-	-	-	
56	P63	瓦	丸瓦	(16.1)	(13.5)	1.8	-	-	-	-	-	-	-	-	コビキ8	

第9表 出土遺物観察表2 (瓦)

種類	調査・層	種別	形状	高さ	幅	厚さ	瓦目：文様	透気数	瓦目：透気	透気幅	瓦目高	文様高	内径	外径	備考	
27	57	SX54	瓦	丸瓦	(17.2)	(6.8)	2.0	-	-	-	-	-	-	-	-	
	58	SX66	瓦	丸瓦	(22.0)	18.4	2.3	-	-	-	-	-	-	-	-	コビヤ人形陶器
	59	SD11	瓦	丸瓦	(25.5)	17.7	2.0	-	-	-	-	-	-	-	-	
	60	SX20	瓦	丸瓦	(11.9)	(16.0)	2.4	-	-	-	-	-	-	-	-	
	61	SX58	瓦	丸瓦	(12.1)	(7.2)	1.7	-	-	-	-	-	-	-	-	
28	62	SD11	瓦	丸瓦	(15.2)	15.7	1.7	-	-	-	-	-	-	-	-	
	63	SX60	瓦	丸瓦	(21.6)	(11.5)	2.0	-	-	-	-	-	-	-	-	コビヤ系
	64	SD11	瓦	丸瓦	(18.9)	(12.0)	2.2	-	-	-	-	-	-	-	-	
	65	SX64	瓦	丸瓦	(18.5)	(11.6)	2.0	-	-	-	-	-	-	-	-	
	66	V	瓦	丸瓦	(18.4)	(7.5)	1.8	-	-	-	-	-	-	-	-	△新タタキ瓦、朝鮮系?
29	67	SD11	瓦	平瓦	33.3	(17.8)	2.0	-	-	-	-	-	-	-	-	
	68	SD11	瓦	平瓦	33.8	(14.6)	2.0	-	-	-	-	-	-	-	-	
	69	SD11	瓦	平瓦	(31.8)	(17.7)	2.0	-	-	-	-	-	-	-	-	薄地
	70	SD11	瓦	平瓦	(19.9)	(20.6)	1.8	-	-	-	-	-	-	-	-	
	71	SD11	瓦	平瓦	(13.6)	(15.5)	2.0	-	-	-	-	-	-	-	-	
30	72	SD11	瓦	平瓦	(21.5)	(16.9)	2.0	-	-	-	-	-	-	-	-	
	73	SD11	瓦	平瓦	(18.6)	(14.5)	1.9	-	-	-	-	-	-	-	-	
	74	SX68	瓦	平瓦	(13.6)	(6.7)	2.1	-	-	-	-	-	-	-	-	
	75	SD11	瓦	平瓦	(13.7)	(17.2)	1.4	-	-	-	-	-	-	-	-	
	76	SX03	瓦	平瓦	(11.8)	(14.6)	1.7	-	-	-	-	-	-	-	-	
	77	SX62	瓦	平瓦	(20.2)	(7.1)	1.5	-	-	-	-	-	-	-	-	
	78	SX68	瓦	平瓦	(22.3)	(18.6)	1.9	-	-	-	-	-	-	-	-	
	79	SX99	瓦	平瓦	(25.8)	(14.3)	1.9	-	-	-	-	-	-	-	-	
31	80	SX24	瓦	平瓦	(16.6)	16.3	1.9	-	-	-	-	-	-	-	-	
	81	SD11	瓦	平瓦	(19.6)	(8.3)	2.1	-	-	-	-	-	-	-	-	「直」スタンプ
	82	SX85	瓦	平瓦	(16.7)	(11.1)	1.8	-	-	-	-	-	-	-	-	「直」スタンプ
	83	SX65	瓦	平瓦	(13.8)	(23.2)	2.5	-	-	-	-	-	-	-	-	「太方角門」スタンプ
	84	SD11	瓦	平瓦	(35.1)	(13.3)	1.9	-	-	-	-	-	-	-	-	「具」スタンプ
32	85	SX80	瓦	横瓦	(18.6)	(12.9)	2.0	-	-	-	-	-	-	-	-	
	86	SD11	瓦	海鼠瓦	(41.1)	(14.3)	3.3	-	-	-	-	-	-	-	-	
	87	SD11	瓦	海鼠瓦	(17.0)	(14.9)	3.7	-	-	-	-	-	-	-	-	
	88	SD11	瓦	海鼠瓦	(16.4)	(13.5)	2.9	-	-	-	-	-	-	-	-	
	89	SD11	瓦	海鼠瓦	(13.2)	(8.7)	3.3	-	-	-	-	-	-	-	-	
	90	SX62	瓦	海鼠瓦	(11.5)	(10.2)	1.8	-	-	-	-	-	-	-	-	
	91	SX02	瓦	海鼠瓦	(11.2)	♂(13.9) ♀(11.1)	♂2.4 ♀4.1	-	-	-	-	-	-	-	-	
33	92	SD11	瓦	横瓦	(16.1)	(19.1)	4.4	-	-	-	-	-	-	-	-	
	93	SD11	瓦	輪造瓦	13.0	(10.8)	2.0	-	-	-	-	-	-	-	-	
	94	SD11	瓦	輪造瓦	17.8	(5.0)	2.0	-	-	-	-	-	-	-	-	
	95	SD11	瓦	輪造瓦	(13.4)	(7.8)	1.8	-	-	-	-	-	-	-	-	
	96	SX68	瓦	輪造瓦	(7.4)	(9.4)	1.8	-	-	-	-	-	-	-	-	

第10表 出土遺物観察表3 (互)

群別	調査・種別	種別	数量	長さ	幅	厚さ	瓦面：文様	造形数	瓦面：裏面	取付部	瓦厚高	文様高	内径	外径	備考	
34	97	S361	瓦	丸瓦	(6.9)	(13.3)	2.8	-	-	-	-	-	-	-	脚部	
	98	S354	瓦	丸瓦	(25.5)	4.6	4.0	-	-	-	-	-	-	-	角部	
	99	SD11	瓦	丸瓦	(6.3)	(3.3)	1.4	-	-	-	-	-	-	-	縁?	
	100	S344	瓦	丸瓦	(11.9)	(9.8)	1.8	-	-	-	-	-	-	-	○型スタンプ文	
	101	S364	瓦	丸瓦	(13.4)	7.2	2.2	-	-	-	-	-	-	-	裏面	
42	148	IV	瓦	軒丸瓦	-	-	1.4	連続瓦葺文	7	-	1.5	-	-	7.3	8.4	
	149	IV	瓦	軒丸瓦	-	-	1.9	縁文?	-	-	1.8	-	-	-	-	
	150	IV	瓦	軒平瓦	-	-	2.1	大瓦葺式	-	-	-	7.6	5.1	-	-	
	151	IV	瓦	軒平瓦	-	-	-	縦線縁葺文	-	-	-	-	-	-	-	
	152	IV	瓦	軒様瓦	-	-	1.5	鹿瓦島式	-	-	-	4.2	2.4	-	-	
	153	IV	瓦	小碓瓦	-	-	2.0	小碓	-	-	1.6	-	-	8.9	10.7	
	154	IV	瓦	小碓瓦	-	-	2.0	小碓	-	8.8	0.9	-	-	6.1	7.1	
	155	IV	瓦	丸瓦	(14.1)	(11.3)	2.1	-	-	-	-	-	-	-	-	
	156	IV	瓦	丸瓦	(10.7)	(8.5)	2.2	-	-	-	-	-	-	-	-	コビキ8
	157	IV	瓦	平瓦	33.0	(14.9)	2.2	-	-	-	-	-	-	-	-	
158	IV	瓦	平瓦	(15.8)	(18.7)	1.9	-	-	-	-	-	-	-	-		
43	159	IV	瓦	輪縁瓦	15.7	13.1	1.7	-	-	-	-	-	-	-	-	漆喰
	160	IV	瓦	海鼠瓦	(14.3)	(13.6)	3.3	-	-	-	-	-	-	-	-	漆喰、穿孔瓦透なし
	161	IV	瓦	海鼠瓦	(17.3)	(9.2)	2.4	-	-	-	-	-	-	-	-	
	162	IV	瓦	環瓦	(15.4)	(11.1)	4.1	-	-	-	-	-	-	-	-	
	163	IV	瓦	環瓦	(12.8)	(8.2)	4.4	-	-	-	-	-	-	-	-	
	164	IV	瓦	陶製軒丸瓦	-	-	-	均整縁葺三巴文	-	-	2.4	-	-	-	-	
	165	IV	瓦	陶製軒丸瓦	-	-	-	均整縁葺三巴文	-	-	2.5	-	-	-	-	
	166	IV	瓦	陶製軒丸瓦	-	-	2.1	均整縁葺三巴文	-	-	2.5	-	-	-	-	
	167	IV	瓦	陶製軒丸瓦	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	瓦当欠損
	168	IV	瓦	陶製丸瓦	(8.6)	(6.6)	1.5	-	-	-	-	-	-	-	-	
169	IV	瓦	細軒平瓦	(8.2)	(8.1)	1.8	-	-	-	-	-	-	-	-	縁角字タキ文	
54	276	III	瓦	軒丸瓦	-	-	2.1	連続三巴文	11	-	3.1	-	-	6.1	11.1	
	277	IV	瓦	軒丸瓦	-	-	-	連続三巴文	2	-	2.4	-	-	-	-	
	278	SM12	瓦	軒丸瓦	-	-	2.5	連続三巴文	-	-	1.1	-	-	-	-	
	279	SD4	瓦	軒丸瓦	-	-	2.3	連続三巴文	8	-	2.3	-	-	6.6	10.0	
	280	III	瓦	軒丸瓦	-	-	-	牡丹文	-	-	(2.4)	-	-	13.0	-	
	281	SD3	瓦	小碓瓦	-	-	1.9	小碓	-	-	1.1	-	-	9.0	10.9	
	282	III	瓦	鳥伏瓦	-	-	2.8	連続三巴文	3	16.3	1.8	-	-	-	13.0	
	283	SD3	瓦	軒丸瓦	14.9	21.3	2.3	-	-	-	-	-	-	-	-	近代
	284	II	瓦	軒平瓦	-	-	1.6	上向三葉上下	-	-	-	4.5	2.3	-	-	
	285	III	瓦	軒平瓦	-	-	1.5	上向三葉上下	-	-	-	-	-	-	-	
286	SH5	瓦	軒平瓦	-	-	-	-	-	-	-	4.3	2.3	-	-		
287	SD9	瓦	細軒様瓦	-	-	1.5	鹿瓦島式	-	-	-	4.0	2.2	-	-		
288	SD9	瓦	細軒様瓦	-	-	1.7	鹿瓦島式	-	-	-	4.5	2.5	-	-		

第11表 出土遺物観察表4 (五)

種類	標識・層	形状	器種	高さ	幅	厚さ	瓦目：文様	透孔数	瓦目：透孔	透孔径	瓦目高	文様高	内径	文径	備考	
54	289	5D1	瓦	軒瓦	4.6	28.5	1.8	-	-	-	-	-	-	-		
	290	5D9	瓦	丸瓦	(27.4)	12.9	2.0	-	-	-	-	-	-	-		
	291	II	瓦	丸瓦	(7.5)	(9.0)	1.9	-	-	-	-	-	-	-		
	292	II	瓦	丸瓦	(8.4)	(8.3)	2.6	-	-	-	-	-	-	-		
	293	II	瓦	丸瓦	(13.5)	15.4	2.6	-	-	-	-	-	-	-		
	294	SR3	瓦	丸瓦	(13.6)	(5.0)	2.0	-	-	-	-	-	-	-		
	295	III	瓦	丸瓦	(19.1)	(14.0)	2.2	-	-	-	-	-	-	-		
55	296	SR3	瓦	丸瓦	(10.9)	(7.9)	1.6	-	-	-	-	-	-	-		
	297	5D9	瓦	丸瓦	(12.2)	12.8	1.7	-	-	-	-	-	-	-		
	298	II	瓦	丸瓦	(16.1)	(7.8)	2.0	-	-	-	-	-	-	-		
	299	III	瓦	平瓦	(21.7)	(14.0)	(2.0)	-	-	-	-	-	-	-		
	300	II	瓦	横瓦	(23.0)	(12.6)	2.3	-	-	-	-	-	-	-		
	301	5D9	瓦	横瓦	28.3	27.3	2.1	-	-	-	-	-	-	-		
	302	II	瓦	横瓦	(14.5)	(11.2)	2.0	-	-	-	-	-	-	-		
56	303	5D4	瓦	海屋瓦	(25.0)	(12.8)	2.3	-	-	-	-	-	-	-		
	304	SM12	瓦	丸瓦	(26.9)	(30.8)	±6.5 ±6.2	-	-	-	-	-	-	-		
	305	II	瓦	丸瓦	(12.6)	(7.2)	4.4	-	-	-	-	-	-	-		
	306	III	瓦	丸瓦	(7.0)	(7.5)	2.6	-	-	-	-	-	-	-		
	307	II_60	瓦	陶製平瓦	(8.0)	(10.5)	1.6	-	-	-	-	-	-	-		
	308	II	瓦	陶製平瓦	(8.6)	(7.8)	1.4	-	-	-	-	-	-	-		
	57	309	I	瓦	軒丸瓦	-	-	3.3	遺珠三巴文	12	16.3	2.3	-	-	6.0	11.4
310		I	瓦	軒丸瓦	-	-	2.7	遺珠三巴文	12	17.0	2.1	-	-	7.8	12.7	
311		I	瓦	軒丸瓦	-	-	3.3	遺珠三巴文	13	13.0	1.9	-	-	5.0	9.4	
312		I	瓦	軒平瓦	-	-	1.3	上向三葉上下	-	-	-	4.3	2.6	-	-	
313		I	瓦	軒平瓦	-	-	2.8	龍瓦鳥式	-	-	-	6.1	4.4	-	-	中心磨り破綻。
314		I	瓦	鑲軒平瓦	-	-	2.2	龍瓦鳥式	-	-	-	4.4	2.4	-	-	スタンプ (磨滅の古土平明燐) 文様径4.1x3.5
315		I	瓦	軒平瓦	-	-	2.0	-	-	-	-	4.9	-	-	-	「瓦工業組合 七」スタンプ
316		I	瓦	軒横瓦	(5.9)	-	1.9	-	-	-	-	-	-	-	-	近代：万十瓦
317		I	瓦	丸瓦	(12.1)	(17.1)	2.0	-	-	-	-	-	-	-	-	
318		I	瓦	丸瓦	(15.9)	12.3	1.7	-	-	-	-	-	-	-	-	
58		319	I	瓦	丸瓦	(10.4)	(10.2)	4.3	-	-	-	-	-	-	-	磨滅？
	320	I	瓦	丸瓦	(6.9)	(10.3)	2.6	-	-	-	-	-	-	-	「大」磨削	
	321	I	瓦	陶製丸瓦	(7.9)	(6.0)	1.5	-	-	-	-	-	-	-		
	322	I	瓦	陶製丸瓦	(7.1)	(6.7)	1.4	-	-	-	-	-	-	-		
	323	I	瓦	陶製丸瓦	(5.7)	(6.7)	1.4	-	-	-	-	-	-	-		

第12表 出土遺物観察表5 (陶磁器)

群	種別	遺物番号	種類	図録	位置		胎土色別		胎質	胎釉色別		産地・特徴	備考	
					口徑	底徑	高さ	マンセル		胎土色別				
										胎土色別	マンセル			
35	102	SK36	青磁	碗	-	-	(3.3)	灰黄青	10YR6/2	青磁胎	黒藍色	3G 7.0/2.0	中国	朝鮮羅丹文二次焼成
	103	V_30	青磁	碗	-	-	(3.3)	灰白	2.5YR/1	青磁胎	オリーブグリーン	30Y 7.5/2.0	中国	朝鮮羅丹文二次焼成
	104	V	青磁	碗	-	-	(2.9)	灰白	2.5YR/1	青磁胎	黒藍色	3G 7.0/2.0	中国	華花片彩文二次焼成
	105	V	青磁	華花皿	-	-	(2.0)	灰	N6/	青磁胎	黒藍色	3G 7.0/2.0	中国	二次焼成
	106	SK20	白磁	碗	-	6.1	(2.3)	灰白	N8/	透明胎	黄色	5B	中国	太宰府VまたはV類
	107	V	磁器	碗	-	-	(3.6)	灰白	N8/	透明胎	鉄煎	5B 2.5/4.5	中国	景徳鎮
	108	SK60	磁器	碗	-	-	(3.8)	灰白	N8/	透明胎	黄色	3PB 3.5/5.5	中国?	
	109	V	磁器	碗	-	-	(2.4)	灰白	N6/	透明胎	黒藍色	3PB 5.0/10.0	中国	景徳鎮
	110	SK60	磁器	碗	-	-	(2.8)	灰白	N8/	透明胎	黒藍色	3PB 5.0/10.0	肥前系	
	111	SO11	磁器	碗	-	3.8	(3.1)	にぶい埋	5YR7/4	透明胎	わずれなくさ色	3PB 6.5/5.5	肥前系	紀の館跡群(7)期, 二次焼成
	112	SK60	磁器	碗	-	4.4	(2.6)	灰白	N8/	透明胎	淡はなだ	3PB 5.0/5.5	肥前系	
	113	SK29	磁器	碗	-	4.2	(1.3)	灰白	2.50Y/1	透明胎	鉄煎	5B 1.5/4.5	中国?	景徳鎮・二次焼成
	114	V	磁器	華花皿	-	-	(2.1)	灰白	N8/	透明胎	鉄煎	5B 2.5/4.5	肥前系?	
	115	V	磁器	盃	-	8.8	(8.2)	灰白	N8/	透明胎	淡はなだ	3PB 5.0/5.5	肥前系	
	116	P43	陶磁	碗	11.5	-	(6.0)	灰	N6/	透明胎	わずみ色	N5.5	三島手(後期)	
	117	V	陶磁	碗	-	3.8	(2.3)	灰白	5YR/1	透明胎	-	-	藤原(後野)	白磁肉髻
	118	SK60	陶磁	碗	-	4.5	(2.6)	にぶい埋	5YR7/4	黄胎	棕色	10R 4.0/11.0	藤原(加治木・船橋系)	二次焼成
	119	SO11	陶磁	碗	-	4.9	(3.0)	にぶい埋	5YR6/3	鉄胎	トープ	4YR3.0/1.0	藤原(加治木・船橋系)	
	120	V	陶磁	小碗	6.7	3.1	2.8	にぶい黄緑	10YR5/3	白化磁土+透明胎	アイボリーホワイト	5Y 9.0/1.0	藤原(加治木・船橋系)	白化磁土
	121	V	陶磁	皿	10.2	5.1	2.1	灰白	N7/	黄胎	ゴールド	2Y5.5/10.5	藤原(加治木・船橋系)	砂目
122	V	陶磁	弘花瓶	6.6	-	(7.0)	灰白	5Y7/1	黄胎	トープ	4YR3.0/1.0	藤原(加治木・船橋系)		
123	V	陶磁	片口鉢	-	-	(4.5)	にぶい埋	7.5YR6/3	灰胎	黒緑	3G 2.0/1.5	藤原(源代川系)		
124	V	陶磁	皿	16.6	-	(3.3)	灰	N5/	灰胎	黒緑	3G 2.0/1.5	藤原(室平)	二次焼成	
125	V	陶磁	皿	-	-	(3.1)	灰赤	2.5YR6/2	灰胎	灰汁色	5Y 5.0/1.0	藤原(室平)	二次焼成	
126	V	陶磁	水注	-	-	(7.4)	灰	N4/	灰胎	-	-	藤原(室平)		
127	SO11	陶磁	茶碗?	-	-	(5.1)	灰	5Y5/1	灰胎	生成色	8YR 9.0/1.0	藤原(室平)	二次焼成	
36	128	V	陶磁	磁鉢	-	-	(5.2)	灰褐	5YR5/2	灰胎	-	-	藤原(室平)?	
	129	SK24	陶磁	盃	-	-	(5.7)	灰褐	5YR6/2	灰胎	シダーグリーン	5Y 2.5/1.5	藤原(源代川系)	
	130	SK60	陶磁	鉢	22.8	-	(2.1)	灰	N4/	灰胎	トープ	4YR3.0/1.0	藤原(室平)	
	131	SK60	陶磁	鉢	-	-	(8.5)	にぶい赤褐	5YR4/3	-	-	-	沖原	羅刹瓦文
	132	SK60	陶磁	皿	-	17.5	(18.1)	焼灰	N3/	灰胎	灰汁色	5Y 5.0/1.0	藤原(源代川系)	
	133	V	中国陶磁	盃	-	-	(9.0)	黄灰	2.5YR/1	灰胎	トープ	4YR3.0/1.0	中国	中世陶磁
	134	V	中国陶磁	盃	-	-	(3.3)	焼灰	5YR5/1	灰胎	トープ	4YR3.0/1.0	中国	中世陶磁
	135	SK60	陶磁	磁鉢	30.8	-	(6.6)	灰赤	2.5YR6/2	-	-	-	藤原	
	136	V	陶磁	磁鉢	-	-	(6.7)	灰褐	7.5YR5/2	灰胎	-	-	藤原	
	137	SO11	陶磁	磁鉢	-	-	(7.6)	暗赤灰	5R4/1	-	-	-	藤原	
138	P59	陶磁	鉢	-	-	(9.2)	にぶい赤褐	2.5YR5/4	-	-	-	沖原	羅刹瓦文	
44	170	IV_51	青磁	皿	8.9	4.4	2.6	灰白	N6/	青磁胎	ろくしょう	3G 5.0/5.0	中国	売形品
	171	IV_29	青磁	皿	-	-	(4.3)	灰白	2.5YR/1	青磁胎	ろくしょう	3G 5.0/5.0	中国	中世
	172	IV	陶磁器	碗	-	-	(3.2)	灰白	N6/	透明胎	黒藍色	3PB 5.0/10.0	中国	青花

第13表 出土遺物観察表6 (陶磁器)

標本 番号	陶磁 器	器種	形状	口径	寸法		胎土色調		施装	釉薬色調		産地・特徴	備考
					底径	高さ	色名	マンセル		色名	マンセル		
173	IV	甕	丸	-	5.6	(2.9)	にぶい黄緑	10YR7/2	透明釉	黄緑色	3PB 5.0/10.0	中国 (漳州系)	
174	IV	陶磁器	丸	-	-	(3.8)	灰白	5Y6/1	透明釉	黄緑色	6PB 3.5/11.5	中国	
175	IV	陶磁器	丸	-	-	(5.4)	灰白	N6/	透明釉	黄緑色	6PB 3.5/11.5	中国	
176	IV	陶磁器	丸	-	4.0	(1.4)	灰白	N6/	透明釉	黄緑色	3PB 2.0/10.0	中国	
177	IV	陶磁器	丸	9.9	3.8	5.2	灰白	N6/	透明釉	鉄黒	5B 2.5/4.5	藤原朝	逸文
178	IV	磁器	丸	10.4	-	(3.7)	灰白	N6/	透明釉	スレートグリーン	3G 4.0/2.0	肥前系?中国?	
179	IV	磁器	丸	10.4	-	(4.8)	灰白	2.5YR/1	透明釉	わずれなぐさ色	3PB 6.5/5.5	藤原朝	
180	IV	陶磁器	皿	-	3.2	(3.7)	灰白	5Y6/1	透明釉	鉄黒	5B 2.5/4.5	藤原朝	逸文二次焼成
181	IV	陶磁器	丸	-	4.2	(4.5)	灰白	5YR/1	透明釉	わずれなぐさ色	3PB 6.5/5.5	藤原朝	
182	III	陶磁器	丸	-	5.6	(2.8)	灰白	5Y6/1	透明釉	わずれなぐさ色	3PB 6.5/5.5	逸付	二次焼成
183	IV	陶磁器	丸	-	4.6	(2.3)	灰白	N6/	透明釉	鉄黒	5B 2.5/4.5	中国?肥前系?	銘文「清福」
184	IV	陶磁器	皿	12.2	6.2	3.2	灰白	N6/	透明釉	濃藍	3PB 2.0/5.0	肥前系?藤原?	
185	IV	陶磁器	皿	13.0	7.8	4.0	灰白	N6/	透明釉	わずれなぐさ色	3PB 6.5/5.5	肥前系?藤原?	
186	IV_47	陶磁器	大皿	20.0	12.3	4.2	灰白	5Y6/1	透明釉	鉄黒	5B 2.5/4.5	逸付	
187	IV_37	陶磁器	皿	-	-	(3.6)	灰白	N/1	透明釉	うす群青	6PB 5.0/10.0	逸付	
188	IV	陶磁器	大皿	-	13.0	(1.8)	灰白	5Y6/1	透明釉	群青色	6PB 3.5/11.5	肥前系	
189	IV	陶磁器	皿	-	8.0	(1.7)	灰白	2.5YR/1	透明釉	藍色	5B6 2.5/4.5	肥前系	
190	IV	磁器	筒形瓶	6.7	3.2	(6.4)	灰白	N6/	透明釉	スレートグリーン	3G 4.0/2.0	肥前系	
191	IV_62	陶磁器	筒形瓶	-	6.0	(6.3)	灰白	5Y6/1	透明釉	群青色	6PB 3.5/11.5	肥前系	
192	IV	陶磁器	蓋	8.4	直径 10.5	(2.6)	灰白	N6/	透明釉	濃藍	3PB 2.0/5.0	逸付	
193	IV	磁器	丸	8.9	3.1	4.2	灰白	N6/	透明釉	マジョリカブルー	3PB 2.5/9.5	瀬戸	
194	IV_52	陶磁器	小皿	7.2	2.4	3.6	灰白	10Y6/1	透明釉	空白	5B 8.5/2.0	肥前系?	
195	IV	陶磁	丸	10.8	-	(3.8)	灰白	2.5YR/1	透明釉	アイボリホワイト	5Y 9.0/1.0	藤原 (肥野)	白胎陶器
196	IV	陶磁	丸	-	4.4	(2.1)	灰白	10YR/2	透明釉	アイボリホワイト	5Y 9.0/1.0	藤原 (肥野)	白胎陶器
197	IV	陶磁	丸	-	5.0	(2.9)	灰白	2.5YR/1	透明釉	アイボリホワイト	5Y 9.0/1.0	藤原 (肥野)	白胎陶器
198	IV_54	陶磁	型鉢皿	-	-	2.4	灰白	2.5YR/2	透明釉	-	-	藤原 (肥野)	冷水罎
199	IV	陶磁	茶碗	-	-	(3.0)	灰白	10YR/2	透明釉	オリーブドラブ	5Y 4.5/2.0	室積	
200	IV	陶磁	茶碗	6.6	-	7.8	灰白	2.5YR/1	透明釉	パールホワイト	N6.5	藤原 (肥野)	白胎陶器
201	IV	陶磁	皿	-	-	(3.8)	灰黄	2.5Y7/2	透明釉	オリーブドラブ	5Y 4.5/2.0	三島平 (兼原)	
202	IV	陶磁	筒形瓶	11.6	-	(3.4)	灰白	2.5YR/2	透明釉	オリーブグリーン	3GY 3.5/9.0	室積	
203	IV_41	陶磁	皿	-	-	(8.0)	灰白	2.5Y7/1	透明釉	オリーブグリーン	3GY 3.5/9.0	室積	
204	II	陶磁	茶碗	-	5.0	(2.4)	浅黄緑	10YR/3	透明釉	くり色	4YR 2.0/6.5	藤原 (肥野)	
205	II	陶磁	皿	-	-	(2.2)	灰白	10YR/1	透明釉	-	-	藤原 (肥野)	
206	IV_69	陶磁器	丸	-	4.1	(2.1)	灰白	2.5YR/1	透明釉	藍色	6PB 2.0/5.0	藤原朝	逸文
207	IV	磁器	筒形瓶	6.9	3.4	(6.3)	灰白	N6/	透明釉+黄 磁粉	濃藍	3PB 2.0/5.0	肥前系	
208	IV	磁器	小皿	6.5	3.0	2.5	灰白	N6/	透明釉	黄緑色	3G 7.0/2.0	藤原 (加治木・嵯良系)	
209	IV	陶磁	小皿	7.8	3.3	4.0	灰白	N6/	黄磁粉	黄緑色	3G 7.0/2.0	藤原 (加治木・嵯良系)	蛇の目輪刺ぎ
210	IV	陶磁	丸	-	3.5	(3.7)	灰白	N6/	黄磁粉	黄緑色	3G 7.0/2.0	藤原 (加治木・嵯良系)	
211	IV	陶磁	皿	11.5	-	(3.8)	灰白	7.5Y7/1	黄磁粉	ブロンズ	5Y 4.0/5.5	藤原 (加治木・嵯良系)	
212	IV	陶磁	小皿	-	3.4	(2.6)	灰白	2.5Y7/1	黄磁粉	ブロンズ	5Y 4.0/5.5	藤原 (加治木・嵯良系)	

第14表 出土遺物観察表7 (陶磁器)

調査 番号	発掘 層	曜子	線装	位置			胎土色別		胎質	胎物色別		産地・特徴	備考	
				口徑	底徑	高さ	色別	マンセル		色別	マンセル			
46	213	IV	陶磁	碗	-	4.4	(2.0)	灰褐	5YR5/2	黒胎軸	黒紫色	5Y 2.0/0.5	瀬摩 (加治木・結良風)	碗の目録割り
	214	IV	陶磁	碗	-	4.1	(2.9)	灰白	10YR7/1	黒胎軸	灰青色	5Y 5.0/1.0	瀬摩 (加治木・結良風)	碗の目録割り
	215	IV	陶磁	碗	-	4.5	(3.9)	灰褐	5YR6/2	黒胎軸	灰青色	5Y 5.0/1.0	瀬摩 (加治木・結良風)	碗の目録割り
	216	IV	陶磁	皿	10.2	4.5	2.5	灰白	N7/	黒胎軸	トープ	4YR0.0/0.0	瀬摩 (加治木・結良風)	砂目
	217	IV	陶磁	小皿	10.8	4.8	2.0	灰赤	2.5YR6/2	黒胎軸	ブロンズ	5Y 4.0/5.5	瀬摩 (加治木・結良風)	碗の目録割り
	218	IV	陶磁	小皿	9.8	3.8	2.9	灰褐	7.5YR6/2	黒胎軸	ブロンズ	5Y 4.0/5.5	瀬摩 (加治木・結良風)	碗の目録割り
	219	IV_24	陶磁	皿	9.2	3.5	3.3	におい黄緑	10YR7/3	黒胎軸	黒青色	4R 2.0/1.5	瀬摩 (加治木・結良風)	碗の目録割り
	220	IV	陶磁	皿	-	4.6	1.8	赤橙	10R6/6	黒胎軸	-	-	瀬摩 (加治木・結良風)	砂目・異状
	221	IV_15	陶磁	碗	8.4	4.2	(4.8)	灰褐	7.5YR6/2	化粧土+滑 切粉	サロー	5Y 7.5/2.0	瀬摩 (加治木・結良風)	砂目・化粧土
	222	IV	陶磁	皿	15.9	-	(3.8)	灰黄	2.5YR2/2	黄胎軸	オイスター	5Y 7.5/1.0	瀬摩 (加治木・結良風)	化粧土
	223	IV_78	陶磁	異形碗	-	6.0	(4.0)	灰褐	5YR6/2	黒胎軸	黒茶	8YR 2.5/1.5	瀬摩 (加治木・結良風)	
	224	IV	陶磁	灯明皿	-	5.0	(2.8)	黄	5YR6/6	黒胎軸	-	-	瀬摩 (加治木・結良風)	二次焼成
47	225	IV	陶磁	仏蘭瓶	-	4.8	4.0	灰白	2.5YR/2	黄胎軸	ブロンズ	5Y 4.0/5.5	瀬摩 (加治木・結良風)	碗の目録割り
	226	IV	陶磁	灯明台 (家藏)	-	4.6	(3.9)	灰	N6/	黒胎軸	オリブグリーン	3GY 3.5/5.0	瀬摩 (加治木・結良風)	
	227	IV	陶磁	仏花瓶	-	-	(5.3)	緑灰	10YR6/1	黒胎軸	オリブドラブ	5Y 4.5/2.0	瀬摩 (加治木・結良風)	
	228	IV	陶磁	仏花瓶	-	5.7	(7.0)	暗赤灰	10R4/1	黒胎軸	黒色	N1.5	瀬摩 (加治木・結良風)	
	229	IV	陶磁	皿	-	6.2	(3.1)	灰白	2.5YR/1	黄胎軸	からし色	5Y 4.0/10.5	瀬摩 (加治木・結良風)	
	230	IV	陶磁	水筒	-	-	3.5	黄灰	2.5YR/1	透明軸	モスグリーン	3GY 5.5/5.5	瀬摩 (加治木・結良風)	化粧土
	231	IV	陶磁	火入	9.3	-	(2.4)	灰白	2.5YR/1	黄胎軸	ブロンズ	5Y 4.0/5.5	瀬摩 (加治木・結良風)	
	232	IV	陶磁	皿	5.2	胎底 6.0	(2.5)	におい黄	5YR6/4	黒胎軸	枯草色	8YR 4.5/6.0	瀬摩 (加治木・結良 風?)	
	233	IV	陶磁	皿	-	-	(3.1)	灰白	2.5Y7/1	黒胎軸	オイスター	5Y 7.5/1.0	瀬摩 (加治木・結良風)	裏面に黒胎軸で磨付。
	234	IV	陶磁	鉢	-	-	(6.2)	灰褐	7.5YR6/2	灰胎	灰青色	5Y 5.0/1.0	瀬摩 (豊平)	
	235	IV	陶磁	磁鉢	23.8	-	(5.2)	灰赤	2.5YR6/2	灰胎	-	-	瀬摩 (豊平)	二次焼成
	236	IV_23	陶磁	磁鉢	31.8	-	(6.8)	におい赤褐	2.5YR5/4	灰胎	黒茶	8YR 2.5/1.5	瀬摩 (豊平川尾)	
48	237	IV	陶磁	磁鉢	15.4	-	(4.3)	灰赤	2.5YR5/2	灰胎	黒紫色	5Y 2.0/0.5	瀬摩 (豊平川尾)	
	238	IV	陶磁	磁鉢	-	-	(6.2)	におい黄	2.5YR6/4	灰胎	灰青色	5Y 5.0/1.0	瀬摩 (豊平川尾)	
	239	IV	陶磁	磁鉢	-	-	(3.7)	灰褐	7.5YR5/2	灰胎	-	-	瀬摩 (豊平)	二次焼成
	240	IV	陶磁	磁水鉢	-	12.0	(6.3)	灰黄緑	10YR5/2	灰胎	-	-	瀬摩 (豊平川尾)	二次焼成
	241	IV	陶磁	片口鉢	-	-	(6.4)	におい赤褐	10YR6/4	灰胎	オリブグリーン	3GY 3.5/5.0	瀬摩 (豊平川尾)	二次焼成
	242	IV_11	陶磁	磁鉢	-	12.2	(9.3)	赤灰	2.5YR4/1	灰胎	黒茶	8YR 2.5/1.5	瀬摩 (豊平川尾)	
	243	IV	陶磁	磁水鉢	-	-	(9.6)	黄	2.5YR6/6	灰胎	-	-	瀬摩 (豊平川尾)	二次焼成
	244	IV	陶磁	磁水鉢	-	16.9	(1.7)	黄	5YR6/6	灰胎	-	-	瀬摩 (豊平川尾)	二次焼成
	245	IV	陶磁	皿	15.0	-	(7.5)	灰赤	2.5YR5/2	灰胎	オリブドラブ	5Y 4.5/2.0	瀬摩 (豊平)	異状
	246	IV	陶磁	皿	10.0	-	(4.5)	灰	N6/	灰胎	灰青色	5Y 5.0/1.0	瀬摩 (豊平)	
	247	IV	陶磁	皿	-	9.8	(6.3)	灰	N5/	灰胎	-	-	瀬摩 (豊平川尾)	
	248	IV	陶磁	皿	34.0	-	(3.7)	灰赤	10R4/2	灰胎	灰青色	5Y 5.0/1.0	瀬摩 (豊平)	異状
249	IV	陶磁	皿	-	-	(6.8)	灰赤	2.5YR5/2	灰胎	-	-	瀬摩 (豊平)	異状	
250	IV	陶磁	皿	-	-	(3.7)	におい黄	2.5YR6/4	灰胎	灰青色	5Y 5.0/1.0	瀬摩 (豊平)		
251	IV	陶磁	皿	-	-	(5.1)	灰	5Y6/1	灰胎	灰青色	5Y 5.0/1.0	瀬摩 (豊平)		
252	IV	陶磁	皿	胎底 3.0	-	(2.1)	緑灰	10YR6/1	灰胎	-	-	瀬摩 (豊平川尾)	二次焼成	

第15表 出土遺物観察表8 (陶磁器)

発掘 層号	発掘 番号	種類	形状	口径	底径	高さ	胎土色調		施装	釉薬色調		産地・特徴	備考		
							色名	マンセル		色名	マンセル				
48	253	IV	陶器	蓋	-	-	(2.5)	にぶい赤褐色	2.5YR5/4	灰緑	灰汁色	5Y 5.0/1.0	薩摩 (近代川尻)		
	254	IV	陶器	茶碗	-	-	(5.3)	にぶい緑	5YR6/4	灰緑	モスグリーン	3GY 5.5/5.5	薩摩 (近代川尻)		
	255	IV	陶器	茶碗	-	-	(7.0)	にぶい赤褐色	5YR5/4	灰緑	-	-	薩摩 (近代川尻?)	二次焼成	
	256	IV	陶器	茶碗	9.0	-	(5.3)	黄灰	2.5Y5/1	灰緑	灰汁色	5Y 5.0/1.0	薩摩 (寛平)		
49	257	IV	陶器	大鉢	-	11.0	(3.2)	黄灰緑	10YR6/2	透明釉・鉄 粒	スノクホワイト	N9.5	武蔵	二次焼成	
	258	IV	陶器	鉢	-	-	2.7	緑灰	7.5YR4/1	透明釉・鉄 粒	-	-	武蔵	二次焼成	
	259	IV	陶器	鉢	-	-	(4.8)	黄灰	2.5Y6/1	-	-	-	武蔵		
	260	IV	陶器	碗	9.4	3.6	4.5	緑灰	10YR5/1	-	-	-	2Y 9.0/2.0	河内国	
	261	IV	陶器	茶碗	-	-	3.1	灰白	2.5Y8/1	-	オイスター	5Y 7.5/1.0	沖縄		
	262	IV	陶器	茶碗	5.6	-	(3.3)	にぶい黄褐色	10YR7/2	-	コービーブラウン	8YR 3.5/6.0	沖縄		
	263	IV_25	陶器	蓋	16.0	-	(4.5)	赤褐色	10R4/3	-	-	-	-	沖縄	
	264	IV	陶器	大鉢	-	-	(6.5)	灰白	2.5Y8/1	透明釉・鉄 粒	油色	5Y 6.0/6.0	産地不明		
50	309	II	陶磁器	碗	10.2	3.5	5.0	灰白	5Y8/1	透明釉	藍色	3PB 3.5/5.5	薩摩磁器	流文	
	310	II	陶磁器	碗	-	3.9	(3.0)	灰白	2.5Y8/1	-	わずれなぐさ色	3PB 6.5/5.5	薩摩磁器	流文	
	311	III	磁器	碗	10.1	-	(3.3)	灰白	N6/	透明釉	黄草色	3PB 5.0/10.0	薩摩磁器		
	312	II	磁器	碗	11.2	-	(3.5)	灰白	N6/	透明釉	黄色	5BG 2.5/4.5	薩摩磁器		
	313	III	磁器	碗	-	4.2	(2.7)	灰白	10Y8/1	透明釉	濃藍	3PB 2.0/5.0	薩摩磁器		
	314	III	磁器	碗	8.9	3.4	5.9	灰白	N6/	透明釉	黄草色	6PB 3.5/11.5	近代薩摩?		
	315	III	陶磁器	皿	10.1	5.2	2.5	灰白	N6/	透明釉	鉄粒	5B 2.5/4.5	肥前系	幕末	
	316	III	陶磁器	皿	-	11.0	(1.9)	灰白	2.5Y8/1	透明釉	マジョリカブルー	3PB 2.5/9.5	肥前系		
	317	III	陶磁器	肉付	-	-	(6.9)	灰白	2.5Y8/1	透明釉	濃藍	3PB 2.0/5.0	肥前系		
	318	II	陶磁器	火入	13.7	-	(11.0)	灰白	7.5Y8/1	透明釉	黄草色	3PB 5.0/10.0	近代薩摩?		
	319	III	陶磁器	皿	8.2	高径 9.9	1.4	灰白	5Y8/1	透明釉	浅はなだ	3PB 5.0/5.5	肥前系		
	320	SR1	陶磁器	皿	9.9	高径 11.1	3.4	灰白	N6/	透明釉	鉄粒	5B 2.5/4.5	肥前系		
	321	II	磁器	蓋	3.1	-	(3.0)	灰白	N6/	透明釉	ブルーウォッシュ	3PB 8.5/1.0	赤坂		
	322	SR4	青磁	黄銅網	9.0	6.0	4.0	灰白	5Y8/1	透明釉	青褐色	9G 6.0/5.0	肥前系		
	323	II	青磁	碗	-	5.2	(1.4)	黄灰	2.5Y6/1	青磁釉	わさび色	3G 6.5/5.0	中国		
324	II	青磁	香炉	10.8	-	(4.5)	灰白	N6/	青磁釉	青褐色	9G 6.0/5.0	肥前系			
325	II	陶器	小碗	-	3.4	(3.3)	灰白	5Y8/1	透明釉	生成色	8YR 9.0/1.0	薩摩 (寛野)	自動陶器		
326	SM13	陶器	台付皿	-	-	(9.5)	灰白	5Y8/2	透明釉	アイボリホワイト	5Y 9.0/1.0	薩摩 (寛野)	自動陶器		
327	II	陶磁器	勝手	-	-	-	灰白	5Y8/2	透明釉	アイボリホワイト	5Y 9.0/1.0	薩摩 (寛野)	自動陶器		
328	SM13	陶器	鉢	-	-	(5.8)	灰白	2.5Y8/2	透明釉	生成色	8YR 9.0/1.0	薩摩 (寛野)	自動陶器		
329	II	陶磁器	小碗	5.0	2.6	3.3	灰黄	2.5Y7/2	透明釉	オリブドラブ	5Y 4.5/2.0	三島手 (赤坂)			
330	II	陶器	大皿	-	9.0	(2.1)	灰白	10YR8/1	透明釉	シルバークレイ	N7.5	薩摩 (寛野)	自動陶器		
331	III	陶器	茶碗	-	-	(7.1)	灰白	2.5Y7/1	透明釉	マナガニー	4R 2.5/6.0	薩摩 (寛野)			
50	332	S06	陶器	碗	-	4.2	(2.1)	灰白	2.5Y8/1	黄磁釉	スレートグリーン	3G 4.0/2.0	薩摩 (加治木・植良高)	蛇の目輪刺子	
	333	S06	陶器	碗	-	5.2	(2.1)	灰白	5Y8/1	黄磁釉	うこん色	2Y 7.0/11.0	薩摩 (加治木・植良高)	蛇の目輪刺子	
	334	S01	陶器	鉢	-	3.5	(2.9)	灰黄	2.5Y7/2	黄磁釉	モスグリーン	3GY 5.5/5.5	薩摩 (加治木・植良高)	蛇の目輪刺子	
	335	II	陶器	小碗	-	3.4	(2.0)	灰白	10YR8/1	黄磁釉	トープ	4YR3.0/1.0	薩摩 (加治木・植良高)	蛇の目輪刺子	
	336	III	陶磁器	碗	-	3.4	(2.4)	灰白	10R7/1	黄磁釉	ブロンズ	5Y 4.0/5.5	薩摩 (加治木・植良高)	蛇の目輪刺子	

第16表 出土遺物観察表9 (陶磁器)

押戻	調査 番号	種類	図録 番号	寸法			胎土色調		胎質	胎物色調		産地・特徴	備考	
				口径	底径	高さ	色名	マンセル		色名	マンセル			
				cm	cm	cm								
59	337	II	陶磁	皿	10.4	4.4	2.5	青灰	506/1	黄胎物	河俣ゆずみ	3G 5.0/1.0	薩摩(加治木・結良瓦)	砂目
	338	III	陶磁	皿	10.5	(4.1)	2.4	橙	2.5YR6/6	黄胎物	マルーン	7R 2.5/6.0	薩摩(加治木・結良瓦)	灯明筋
	339	III	陶磁	皿	-	4.0	(1.5)	にぶい橙	5YR6/4	黄胎物	結良色	8YR 4.5/6.0	薩摩(加治木・結良瓦)	目録
	340	II	陶磁	灯明筋付	-	5.3	(3.1)	にぶい橙	7.5YR6/4	黄胎物	コーヒープラウン	8YR 3.5/6.0	薩摩(加治木・結良瓦)	
	341	III	陶磁	水筒	-	2.5	3.2	灰白	2.5YR/1	透明胎	ミストグリーン	30Y 7.5/2.0	薩摩(加治木・結良瓦)	
	342	II	陶磁	鉢	-	10.1	(5.7)	灰白	5Y7/1	透明胎	モスグリーン	30Y 5.5/5.5	薩摩(加治木・結良瓦)?	
	343	II	陶磁	片口鉢	-	-	(6.0)	灰	N4/	灰胎	灰汁色	5Y 5.0/1.0	薩摩(望平)	望平1類
	344	II	陶磁	鉢	27.4	23.8	9.0	焼灰	7.5YR4/2	灰胎	灰汁色	5Y 5.0/1.0	薩摩(望平)?	
	345	SM13	陶磁	磁鉢	-	-	(6.4)	橙	2.5YR6/6	灰胎	灰汁色	5Y	薩摩	二次焼成
	346	II	陶磁	磁鉢	-	-	(8.5)	にぶい赤褐	2.5YR5/4	灰胎	灰汁色	5Y 5.0/1.0	薩摩(置代川)	
347	II	陶磁	磁木鉢	-	-	(2.8)	黄灰	2.5Y4/1	灰胎	灰汁色	5Y 5.0/1.0	薩摩(置代川)		
348	I	陶磁	磁鉢	22.2	-	(3.2)	灰	5Y4/1	灰胎	灰汁色	5Y 5.0/1.0	薩摩(置代川)		
60	349	II	陶磁	皿	-	-	(4.4)	灰褐	5YR5/2	灰胎	灰汁色	5Y 5.0/1.0	薩摩(望平)	貝目
	350	II	陶磁	皿	-	-	(8.2)	にぶい赤褐	2.5YR5/3	灰胎	灰汁色	5Y 5.0/1.0	薩摩(置代川)	
	351	III	陶磁	皿	31.7	-	(10.0)	焼灰	7.5YR4/1	灰胎	灰汁色	5Y 5.0/1.0	薩摩(置代川)	
	352	SD7	陶磁	鉢	22.2	-	(21.4)	明赤褐	2.5YR5/6	灰胎	黒褐色	4R 2.0/1.5	薩摩(置代川)	
	353	III	陶磁	皿	10.5	-	(6.4)	焼灰	7.5YR5/1	灰胎	エゴニー	5Y 3.0/0.5	薩摩(望平)	
	354	SM12	陶磁	磁鉢	5.7	-	(3.0)	灰	N6/	灰胎	オイスター	5Y 7.5/1.0	薩摩(望平)	二次焼成
	355	II	陶磁	茶碗	-	6.6	(4.3)	明赤褐	2.5YR5/6	灰胎	くり色	4YR 2.0/0.5	薩摩(置代川)	
	356	II	陶磁	皿?	-	-	(5.9)	灰褐	7.5YR6/2	透明胎	結良色, エメラルドグリーン	8YR 4.5/6.0 3G 5.0/0.5	産地不明	三彩?
	357	III	陶磁	皿	-	-	(5.8)	灰白	10YR7/2	灰胎	オイスター	5Y 7.5/1.0	薩摩	白化粘土+鉄粒
	358	II	陶磁	鉢	-	-	(3.4)	にぶい橙	7.5YR6/4	透明胎+鉄粒	結良色	8YR 4.5/6.0	薩摩	白化粘土
359	II	陶磁	鉢	-	-	(5.4)	にぶい赤褐	2.5YR4/4	-	-	-	沖積		
360	SD4	陶磁	四耳壺	-	-	(1.8)	灰	N6/	灰胎	結良色	8YR 4.5/6.0	中国	中世陶磁器	
361	I	陶磁	磁鉢	-	-	(6.7)	灰褐	5YR5/2	-	-	-	備前		
65	397	I	青磁	碗	-	5.0	(1.9)	灰白	N7/	透明胎	わずらひ色	3G 5.0/5.0	中国	
	398	I	青花	碗	-	4.8	(1.9)	灰白	10YR8/2	透明胎	濃藍	3PB 2.0/5.0	中国(潮州)	
	399	I	青花	皿	-	(4.0)	2.3	灰白	5YR/1	透明胎	透けなど	3PB 5.0/5.5	中国	
	400	I	青花	皿	-	(7.0)	1.2	灰白	N8/	透明胎	黄草色	3PB 5.0/10.0	中国	
	401	I	青花	皿	-	5.4	(1.0)	灰白	N8/	透明胎	コバルトブルー	3PB 3.5/10.0	徳川	
	402	I	磁器	碗	12.0	5.5	5.4	灰白	N8/	透明胎	わずらひなぐさ色	3PB 6.5/5.5	肥前系	
	403	I	陶磁器	皿	8.6	脚部 4.0	1.8	灰白	N8/	透明胎	鉄粒	5B 2.5/4.5	徳川	
	404	I	磁器	異型碗	(7.1)	(4.0)	6.3	灰白	N8/	透明胎	透けなど	3PB 5.0/5.5	肥前系	
	405	I	陶磁	水筒	最大径 3.4	最大深 (5.6)	最大高 (2.5)	灰白	2.5YR/2	透明胎	鉄粒	5B 2.5/4.5	肥前系	
	406	I	陶磁	碗	-	3.4	(2.9)	灰白	2.5YR/1	透明胎	オイスター	5Y 7.5/1.0	薩摩(望野)	
	407	I	陶磁	皿?	-	-	(2.4)	灰白	2.5YR6/2	透明胎	鉄色	5B 2.5/4.5	宗廟跡	
408	I	陶磁	異型碗	11.0	-	(6.8)	灰白	10YR8/2	透明胎	オイスター	5Y 7.5/1.0	三島半		
409	I	陶磁	皿	-	4.4	(3.4)	灰白	10YR8/2	灰胎	黒褐色	4R 2.0/1.5	薩摩(加治木・結良瓦)		
410	I	陶磁	皿	-	5.0	(1.8)	にぶい橙	7.5YR7/4	黄胎物	結良色	8YR 4.5/6.0	薩摩(加治木・結良瓦)		
411	I	陶磁	付付品	8.4	4.2	5.6	灰白	5Y7/1	黄胎物	鉄色	5B 2.5/4.5	薩摩(加治木・結良瓦)		

第17表 出土遺物観察表10 (陶磁器)

調査 番号	発掘 番号	遺物 番号	種類	形状	寸法			胎土色調		施装	釉物色調		産地・特徴	備考	
					口径	底径	高さ	色名	マンセル		色名	マンセル			
65		412	I	陶器	大甕	-	6.6	(4.7)	にぶい焼	5YR7/3	黄緑釉	緑黄色	8YR 4.5/6.0	藤原(加治木・結良高)	
		413	I	陶器	灯明皿	-	5.4	(1.8)	にぶい焼	2.5YR6/3	黄緑釉	オリーブグラーブ	5Y 4.5/2.0	藤原(加治木・結良高)	二次焼成
		414	I	陶器	甕	6.5		3.2	にぶい赤焼	2.5YR5/3	灰釉	灰汁色	5Y 5.0/1.0	藤原(源代山)	
		415	I	陶器	茶碗	-	-	(5.4)	明赤焼	5Y5/6	灰釉	灰汁色	5Y 5.0/1.0	藤原(源代山)	
		416	I	陶器	小甕	2.1	3.5	5.8	焼灰	10YR6/1	黄緑釉	モスグリーン	3GY 5.5/5.5	藤原(加治木・結良高)	白化粘土
		417	I	陶器	盛鉢	-	-	(6.2)	にぶい赤焼	5YR5/3		-	-	藤原(加治木・結良高)	
		418	I	陶器	鉢	23.9	15.5	10.1	にぶい赤焼	2.5YR5/3	灰釉	灰汁色	5Y 5.0/1.0	藤原(源代山)	
		419	I	陶器	甕	9.8	4.3	5.2	灰	7.5YR/1	白化粘土+透明釉	ポトルグリーン	3G 3.0/4.5	肥前系(源清)?	白化粘土+新緑
		420	I	陶器	鉢	-	-	(4.2)	灰焼	7.5YR6/2	透明釉・鉄	灰汁色	5Y 5.0/1.0	源清?	白化粘土+新緑
		421	I	陶器	大鉢	-	-	(12.0)	にぶい焼	7.5YR6/3	透明釉	灰汁色	5Y 5.0/1.0	源清?	白化粘土+新緑
		422	I	陶器	水注	-	-	(5.2)	灰焼	5YR5/2	灰釉	オイスター	5Y 7.5/1.0	沖崎	
		423	I	陶磁器	食器	8.4	-	(6.7)	灰白	NB/	透明釉	マツカイクグリーン	3G 4.0/8.5	肥前食器	
		424	I	磁器	甕	3.8	2.7	4.1	灰白	NB/	透明釉	パールホワイト	NB.5	近現代	藤原本坊合名会社

第18表 出土遺物観察表11 (鉄製品・石製品・古銭・ガラス)

調査 番号	発掘 番号	遺物 番号	種類	形状	寸法 (mm)		備考			
					長さ 口径	厚さ 底径				
36		142	S011	鉄製品	釘	3.1	0.35	0.4		
		49	271	IV	古銭	寛永通宝	2.5	2.5	0.1	
			272	IV	古銭	寛永通宝	2.4	2.4	0.1	
			273	IV	古銭	寛永通宝	2.3	2.3	0.1	
			274	IV	古銭	寛永通宝	2.4	2.4	0.1	
			275	IV	古銭	寛永通宝	2.3	2.3	0.1	
61		372	S09	石製品	甕	(6.4)	(4.6)	1.8		
		373	II	ガラス	甕	3.8	4.1	5.4	(7)	
		374	II	ガラス	インク瓶	2.5	4.1	5.2	(M)	
		375	II	ガラス	燗瓶	1.1	0.5	6.1		
		376	VII	骨製品	甕	(10.0)	+1.7 +1.3 +0.2	+0.5 +0.2		
		377	V	骨製品	甕	(10.5)	+1.5 +0.9	+0.5 +0.6		
62		378	S011	古銭	寛永通宝	2.4	2.4	0.1		
		379	II	古銭	寛永通宝	2.5	2.5	0.1		
		380	II	古銭	寛永通宝	2.3	2.3	0.1		
		381	II	古銭	寛永通宝	2.3	2.3	0.1		
		430	I	石製品	甕	13.5	6.1	2.0		
67		431	I	石製品	甕	13.8	6.3	1.8		
		432	I	石製品	甕	(11.2)	6.4	2.1		
		433	I	ガラス	甕	3.4	3.8	3.6	(甕)	
		434	I	ガラス	燗瓶?	5.8	6.0	2.9	(MONSANTO)	
		435	I	ガラス	甕	3.0	4.5	8.3	(甕?)	
		436	I	ガラス	インク瓶	2.3	4.5	4.0		
		437	I	骨製品	甕	12.1	+1.2 +0.2	+0.5 +0.1		
		438	I	古銭	寛永通宝	2.3	2.3	0.1		
		439	I	古銭	寛永通宝	2.3	2.3	0.1		

第19表 出土遺物観察表12 (土師器・瓦質土器ほか)

調査 番号	発掘 番号	遺物 番号	種類	形状	寸法			胎土・釉物色調		備考	
					口径	底径	高さ	色名	マンセル		
36		139	V	漆器	甕	-	-	(5.7)	灰色	7.5Y/1	
		140	V	土師器	甕	16.2	11.0	3.4	灰白	10YR6/1	
		341	S011	土師器	甕	-	8.0	(3.4)	灰白	7.5Y/1	
		265	IV	土師器	燗瓶	18.0	12.8	3.1	灰白	10YR6/2	
49		266	IV	土師器	甕	12.8	9.8	2.6	浅黄緑	10YR6/3	
		267	IV	土師器	甕	11.0	9.0	2.6	浅黄緑	10YR6/3	
		268	IV	土師器	甕	9.4	5.6	2.6	にぶい赤焼	10YR7/2	
		269	IV	瓦質土師	燗瓶	-	-	-	にぶい赤焼	5YR5/4	
		270	IV	瓦質土師	火鉢	-	21.2	(3.5)	焼灰	7.5YR4/1	
		362	II	瓦質土師	茶碗	-	-	(5.7)	灰白	2.5Y/1	
60		363	II	瓦質土師	火鉢	-	-	(6.7)	甕	7.5Y/6	
		364	S06	土師器	甕	(7.4)	(4.4)	1.4	甕	5YR6/6	
61		365	火質土師	瓦質土師	火鉢	-	18.5	(14.0)	にぶい赤焼	5YR5/4	
		366	II	磁器	甕洗	11.7	10.3	2.8	ブルーウォッシュ	3P08.5/1.0	
		367	II	磁器	甕洗	10.8	8.8	2.9	パールホワイト	NB.5	
		368	V	磁器	甕洗	(10.4)	9.4	2.9	シルバーグレイ	N7.5	
		369	II	磁器	甕洗	-	-	2.7	パールホワイト	NB.5	
		370	II	磁器	パレット	-	-	1.1	ブルーウォッシュ	3P08.5/1.0	
		371	II	磁器	パレット	-	-	0.9	ブルーウォッシュ	3P08.5/1.1	
		425	I	瓦質土師	土甕	14.3	最大径 17.0	厚さ 1.6	浅黄緑	10YR6/3	
66		426	I	土師器	燗瓶	20.4	16.8	3.9	浅黄緑	10YR6/3	
		427	I	土師器	甕	6.6	5.0	1.8	浅黄緑	7.5YR6/4	
		428	I	土師器	火入	(11.4)	(6.7)	10.5	浅黄緑	10YR6/3	
		429	I	土師器	甕	-	-	(6.0)	浅黄緑	7.5YR6/3	

第20表 出土遺物観察表13 (木製品)

調査 番号	遺物 番号	遺物・部	種別	長さ (cm)	a		b		c		説明	備考
					幅	厚さ	幅	厚さ	幅	厚さ		
14	1	エ-4_V_98	杭	18.6	2.3	1.6	-	-	-	-		
	2	エ-13_V_121	杭	57.1	2.9	2.8	2.5	2.4	-	-	マツ類樹皮製茶葉蓋	
	3	オ-5_V_100	杭	45.4	4.1	3.8	2.5	2.4	-	-	アツブキ葺	
	4	オ-5・6_V_102	杭	43.5	5.2	5.4	3.9	3.9	-	-	タブノキ葺	5 調査限り
	5	オ-5_V_101	杭	57.8	4.8	4.3	2.5	2.7	-	-	ヒサカキ葺	5 調査限り
	6	エ-5_V_97	杭	69.0	5.3	5.1	2.8	4.1	-	-	タブノキ葺	
	7	エ-4_V_96	杭	56.0	6.5	5.9	2.9	2.8	-	-	ザクラ葺	
	8	ウ-5_V_107	膠材	23.0	6.6	0.7	-	-	-	-		
21	9	エ-4_P016_352	膠材	15.2	11.3	2.1	-	-	-	-	ヒノキ	
	10	エ-4_P016	膠材	15.5	11.2	2.1	-	-	-	-		
	11	エ-4_P016	膠材	15.3	9.9	2.2	11.3	2.1	-	-		
22	12	エ-4_P020_01	膠材	23.0	11.7	4.5	-	-	-	-		
	13	エ-4_P020_04	膠材	19.5	11.7	2.1	-	-	-	-		
	14	エ-4_P020	膠材	14.9	8.3	2.0	9.7	2.1	-	-	ヒノキ	
	15	エ-4_P020_03	膠材	15.2	8.0	2.0	-	-	-	-		
	16	オ-4_P027	膠材	19.9	11.5	2.0	-	-	-	-		
	37	143	エ-4_V_95	膠材	14.4	15.1	4.7	-	-	-	-	スギ
144		ウ-5_V_93	杭	17.4	3.1	3.5	-	-	-	-	ツバキ葺	5 調査限り
145		オ-4_V_94	杭	61.8	7.1	6.7	4.2	4.4	-	-		
38	146	Y-5・6_SX060_1056	下駄	24.6	8.5	2.2	-	-	-	-		遺行蓋
	147	Y-5・6_SX060	下駄	24.6	9.0	2.2	-	-	-	-		
89	440	H29_SD38E_6	杭	110	5.6	4.9	3.9	4.0	-	-	クマシラ葺クマシラ葺	鹿児島県庁セ (2021) 調査77
	441	H29_SD38E_5	杭	63.5	5.7	5.5	3.0	3.7	-	-		
	442	H29_SD38E_14	杭	91.2	5.3	5.3	4.2	3.8	-	-		
	443	H29_SD38E_7	杭	61.0	5.5	5.8	4.1	4.0	-	-	クスノキ科	鹿児島県庁セ (2021) 調査73
	444	H29_SD38E_3	杭	95.1	4.9	5.2	3.4	4.0	-	-		
90	445	H29_SD38E_1	杭	56.3	4.7	4.7	3.8	3.4	-	-		鹿児島県庁セ (2021) 調査72
	446	H29_SD38E_2	杭	79.0	4.6	3.9	2.4	2.7	-	-		
	447	H29_SD38E_9	杭	76.8	5.1	4.3	3.2	2.5	-	-	クスノキ科	鹿児島県庁セ (2021) 調査74
	448	H29_SD38E_10	杭	66.8	5.7	5.7	3.8	3.6	-	-		
91	449	H29_SD38E_12	杭	82.3	4.7	4.0	3.2	3.1	-	-	クマシラ葺クマシラ葺	鹿児島県庁セ (2021) 調査76
	450	H29_SD38E_8	杭	95.9	4.3	4.0	3.0	1.8	-	-		
	451	H29_SD38E_4	杭	80.3	6.1	5.5	5.1	4.8	-	-	クスノキ科	鹿児島県庁セ (2021) 調査75
	452	H29_SD38E_11	杭	105.0	5.0	4.6	4.6	3.9	-	-		
92	453	H29_SD38E_13	杭	110.6	4.6	4.5	2.9	3.1	-	-		
	454	H29_SD38E_15	杭	67.1	4.3	4.1	2.9	2.8	-	-		
	455	H29_SD38E_16	杭	97.3	5.3	4.6	4.4	3.7	-	-		
93	456	H29_SD38E_17	杭	57.7	5.1	4.6	3.3	3.3	-	-		

第IV章 自然科学分析

鹿児島城跡（犬追物馬場・火除地）出土資料の自然科学分析

株式会社 古環境研究センター

1 自然科学分析の概要

鹿児島城跡（犬追物馬場・火除地）から出土した木製品10点について自然科学分析を行った。分析内容は、樹種同定および放射性炭素年代測定である。以下に、各分析項目ごとに試料の詳細、分析方法、分析結果および考察・所見を記載する。

II 放射性炭素年代測定

1 はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（¹⁴C）の濃度が放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土器付着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの年代測定が可能である（中村，2003）。

2 試料と方法

第21表に試料の詳細を示す。試料の前処理として超音

第21表 鹿児島城跡（犬追物馬場・火除地）における放射性炭素年代測定結果

試料 №	掲載 番号	遺物 番号	測定 № PED-	試料の詳細	種類	前処理 測定法	δ13C (‰)	14C年代 (年BP)	暦年校正用 年代(年BP)	暦年代 (暦正年代)	
										1σ (68.2%確率)	2σ (95.4%確率)
1	144	K025	47135	ウ-5, V 層, 93	木製杭	AAA処理 AMS法	-28.05± 0.13	315±20	316±20	cal AD 1520-1582 (56.0%) cal AD 1623-1637 (12.3%)	cal AD 1498-1600 (76.0%) cal AD 1614-1644 (19.4%)
2	3	K026	47136	オ-5, VI 層, 100	木製杭	AAA処理 AMS法	-29.14±0.14	305±20	306±18	cal AD 1524-1572 (57.2%) cal AD 1630-1640 (11.1%)	cal AD 1510-1593 (74.4%) cal AD 1618-1645 (21.0%)
3	5	K027	47137	オ-5, VI 層, 101	木製杭	AAA処理 AMS法	-27.00± 0.15	270±20	271±20	cal AD 1528-1540 (13.8%) cal AD 1634-1658 (54.4%)	cal AD 1522-1572 (32.7%) cal AD 1628-1664 (60.1%) cal AD 1786-1794 (2.6%)
4	4	K028	47138	オ-5・6, VI層, 102	木製杭	AAA処理 AMS法	-28.41±0.12	310±20	312±18	cal AD 1522-1575 (55.9%) cal AD 1625-1638 (12.4%)	cal AD 1504-1597 (75.7%) cal AD 1616-1644 (19.7%)
5	7	K029	47139	I-4, VI層, 96	木製杭	AAA処理 AMS法	-30.32±0.11	320±20	319±18	cal AD 1520-1531 (9.9%) cal AD 1538-1585 (46.1%) cal AD 1623-1636 (12.3%)	cal AD 1499-1600 (76.7%) cal AD 1614-1642 (18.8%)
6	6	K030	47140	I-5, (VI層), 97	木製杭	AAA処理 AMS法	-27.78± 0.13	360±20	361±21	cal AD 1475-1516 (38.8%) cal AD 1590-1620 (29.5%)	cal AD 1458-1524 (49.1%) cal AD 1558-1632 (46.3%)
7	2	K032	47141	I-13, VI 層, 123①	木製杭	AAA処理 AMS法	-29.57± 0.12	325±20	326±19	cal AD 1510-1528 (13.9%) cal AD 1541-1592 (41.6%) cal AD 1619-1634 (12.7%)	cal AD 1494-1603 (76.1%) cal AD 1608-1639 (19.3%)
8	143	K033	47142	I-4, V層, 95	木製品 (部材)	AAA処理 AMS法	-27.02±0.11	140±20	142±18	cal AD 1682-1696 (9.7%) cal AD 1724-1736 (8.5%) cal AD 1756-1760 (2.3%) cal AD 1802-1812 (6.9%) cal AD 1837-1879 (25.7%) cal AD 1913-1936 (15.2%)	cal AD 1672-1710 (14.9%) cal AD 1718-1778 (20.5%) cal AD 1796-1822 (10.3%) cal AD 1830-1894 (30.6%) cal AD 1905-1944 (19.1%)
9	9	K034	47143	I-4, P016	木製品 (部材)	AAA処理 AMS法	-25.30±0.11	85±20	86±19	cal AD 1700-1721 (23.7%) cal AD 1815-1834 (21.7%) cal AD 1890-1908 (22.9%)	cal AD 1694-1725 (27.5%) cal AD 1810-1917 (68.0%)
10	14	K035	47144	I-4, P020, №2	木製品 (部材)	AAA処理 AMS法	-24.63± 0.10	110±20	109±18	cal AD 1696-1724 (21.6%) cal AD 1812-1838 (19.1%) cal AD 1878-1915 (27.6%)	cal AD 1691-1728 (24.6%) cal AD 1808-1920 (70.8%)

波洗浄、有機溶剤処理（アセトン使用）、酸-アルカリ-酸処理（AAA処理）を行い、測定は加速器質量分析法（AMS：Accelerator Mass Spectrometry）で行った。

3 測定結果

AMS法によって得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素（¹⁴C）年代および暦年代（較正年代）を算出した。第21表にこれらの結果を示し、第68図に各試料の暦年較正結果（較正曲線）、第67図に暦年較正年マルチプロット図を示す。

(1) デルタδ¹³C測定値

試料の測定¹⁴C/¹²C比を補正するための炭素安定同位体比（¹³C/¹²C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。試料のδ¹³C値を-25（‰）に標準化することで同位体分別効果を補正している。

(2) 放射性炭素（¹⁴C）年代測定値

試料の¹⁴C/¹²C比から、現在（AD 1950年基点）から何年前かを計算した値。¹⁴Cの半減期は5730年であるが、国際的慣例によりLibbyの5568年を使用している。付記した統計誤差（±）は1シグマσ（68.2%確率）である。¹⁴C年代値は下1桁を丸めて表記するのが慣例であるが、暦年較正曲線が更新された場合のために下1桁を丸めない暦年較正年代値を併記した。

(3) 暦年代（Calendar Years）

放射性炭素（¹⁴C）年代を実際の年代値に近づけるために、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大

気中¹⁴C濃度の変動や¹⁴Cの半減期の違いを較正している。暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な¹⁴C測定値および福井県水月湖の年縞堆積物データなどにより作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータはIntCal 20、較正プログラムはOxCal 4.4である。

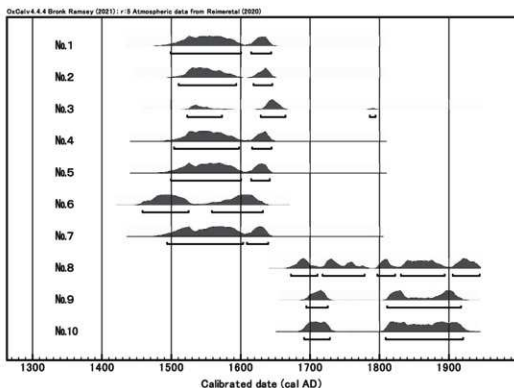
暦年代（較正年代）は、¹⁴C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCalの確率法により1シグマσ（68.2%確率）と2σ（95.4%確率）で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の値が表記される場合もある。（ ）内の%表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4 所見

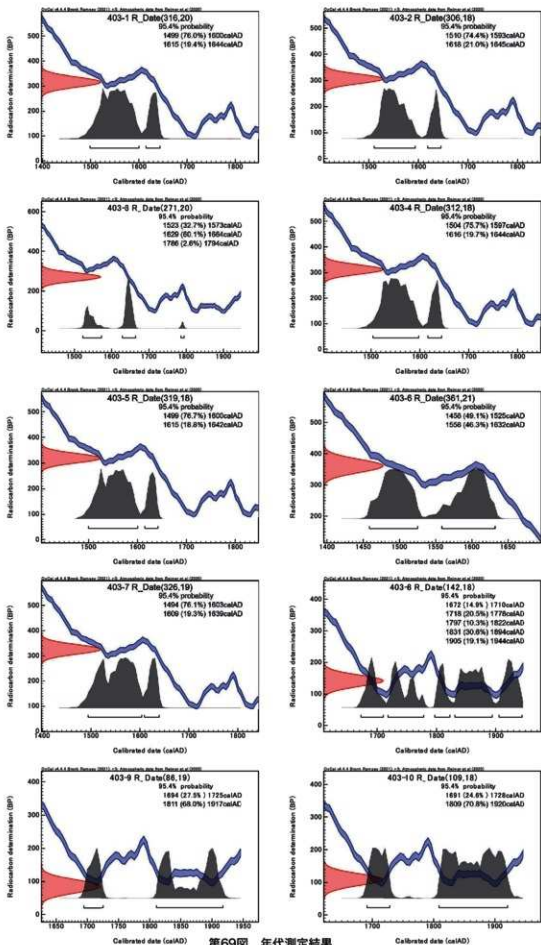
加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果、No.1 (144) では315±20年BP、No.2 (3) では305±20年BP、No.3 (5) では270±20年BP、No.4 (4) では310±20年BP、No.5 (7) では320±20年BP、No.6 (6) では360±20年BP、No.7 (2) では325±20年BP、No.8 (143) では140±20年BP、No.9 (9) では85±20年BP、No.10 (14) では110±20年BPの年代値が得られた。

暦年較正年代マルチプロット図（第68図）によると、杭（No.1～No.7）はおおむね16世紀～17世紀前半頃の範囲に含まれ、木製品（部材：No.8～No.10）は17世紀末～20世紀前半頃の範囲に含まれている。

なお、樹木による年代測定結果は、樹木の伐採年もしくはそれより以前の年代を示しており、樹木の心材に近



第68図 暦年較正年代マルチプロット図



第69圖 年代測定結果

い部分や転用材が利用されていた場合は、考古学的所見よりも古い年代値となることがある。

文献

- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」, 日本第四紀学会, p.3-20.
- 中村俊夫 (2003) 放射性炭素年代測定法と暦年代校正. 環境考古学マニュアル, 同成社, p.301-322.
- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51 (1), 337-360.
- Paula J Reimer et al., (2020) The IntCal 20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 kcal BP). *Radiocarbon*, 62 (4), p.1-33.

III 樹種同定

1 はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2 試料と方法

第22表に試料の詳細を示す。以下の手順で樹種同定を行った。

- 1) 試料を洗浄して付着した異物を除去
- 2) カミソリで木材の基本的三断面（横断面：木口、放射断面：柃目、接線断面：板目）の切片を作成
- 3) 生物顕微鏡（40～1000倍）で観察し、木材の解剖学的形質や現生標本との対比で樹種を同定

3 結果

第22表に同定結果を示し、写真図版（第70・71図）に各分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった木材構造の特徴を記す。

マツ属複雑管束亜属 *Pinus subgen. Diploxylon* マツ科
仮道管、放射柔細胞、放射仮道管および垂直、水平樹脂道などから構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は急な歯所と緩やかな歯所があり、垂直樹脂道が見られる。放射柔細胞の分野壁孔は窓状で、放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。接線断面では放射組織が単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の特徴からマツ属複雑管束亜属に同定される。マツ属複雑管束亜属にはクロマツとアカマツがあり、どちらも北海道南部、本州、四国、九州に分布する常緑高木である。

スギ *Cryptomeria japonica D.Don* スギ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。放射組織は単列の同性放射組織型で1～14細胞高である。以上の特徴からスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本産の常緑高木で高さ40m、径2mに達する。

ヒノキ *Chamaecyparis obtuse Endl.* ヒノキ科

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞が見られる。放射柔細胞の分野壁孔はヒノキ型で1分野に2個存在する。放射

第22表 鹿児島城跡（犬追物馬場・火除地）における樹種同定結果

試料№	掲載番号	遺物番号	試料の詳細	種類	結果 (学名/和名)
1	144	K025	ウ-5, V層, 93	木製杖	<i>Camellia</i> ツバキ属
2	3	K026	オ-5, VI層, 100	木製杖	<i>Meliosma</i> アワブキ属
3	5	K027	オ-5, VI層, 101	木製杖	<i>Eurya</i> ヒサカキ属
4	4	K028	オ-5・6, VI層, 102	木製杖	<i>Machilus</i> タブノキ属
5	7	K029	I-4, VII層, 96	木製杖	<i>Prunus</i> サクランボ属
6	6	K030	I-5, (VII層), 97	木製杖	<i>Machilus</i> タブノキ属
7	2	K032	I-13, (VII層), 121①	木製杖	<i>Pinus subgen. Diploxylon</i> マツ属複雑管束亜属
8	143	K033	I-4, V層, 95	木製品(部材)	<i>Cryptomeria japonica D.Don</i> スギ
9	9	K034	I-4, P016	木製品(部材)	<i>Chamaecyparis obtusa Endl.</i> ヒノキ
10	14	K035	I-4, P020, №2	木製品(部材)	<i>Chamaecyparis obtusa Endl.</i> ヒノキ



横断面
マツ属複雑管束亜属 No. 7



放射断面



接線断面



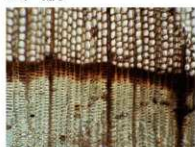
横断面
スギ No. 8



放射断面



接線断面



横断面
ヒノキ No. 9



放射断面



接線断面



横断面
ヒノキ No.10



放射断面



接線断面



横断面
タブノキ属 No. 4



放射断面



接線断面

第70図 鹿兒島城跡（犬追物馬場・火除地）の木材 I



横断面
タブノキ属 No.6



放射断面



接線断面



横断面
サクラ属 No.5



放射断面



接線断面



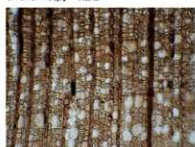
横断面
アワキ属 No.2



放射断面



接線断面



横断面
ツバキ属 No.1



放射断面



接線断面



横断面
ヒサカキ属 No.3



放射断面



接線断面

第71図 鹿兒島城跡 (犬追物馬場・火除地) の木材 II

組織は単列の同性放射組織型で1~15細胞高である。

以上の特徴からヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。

タブノキ属 *Machilus* クスノキ科

やや小型から中型の道管が単独および2~数個放射方向に複合して散在する散孔材である。

道管の周囲を鞘状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。これらの柔細胞の中には大きく影れ上がった油細胞が多く存在する。道管の穿孔は単穿孔がほとんどであるが、階段の数が10本以下の階段穿孔も存在する。放射組織は異性放射組織型で1~3細胞幅である。上下の縁辺部の直立細胞の中には、しばしば大きく影れ上がった油細胞がみられる。

以上の特徴からタブノキに同定される。タブノキは、本州（暖地）、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、高さ15m、径1mに達する。材は耐朽性、保存性ともに中層で、建築、家具、土木、器具、楽器、船、彫刻、薪炭などに用いられる。

サクラ属 *Prunus* バラ科

丸い道管が単独あるいは2~3個放射方向および斜め方向に複合して散在する散孔材である。道管の径は、早材部から晩材部にかけてゆるやかに減少する。道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は同性に近い異性放射組織型を示す。

以上の特徴からサクラ属に同定される。サクラ属には、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、シクリザクラ、ウメ、モモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または低木である。

アワブキ属 *Meliosma* アワブキ科

小型の道管が単独ないしその複合部に1~2個の柔細胞をはさんで放射方向にむかって2~4個複合して散在する散孔材である。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は少なく10本前後である。放射組織は異性放射組織型で1~4細胞幅である。

以上の特徴からアワブキ属に同定される。アワブキ属は本州、四国、九州に分布する。アワブキ、ヤマビワ、ミヤマホウソウなどがあり、落葉または常緑の低木から高木である。

ツバキ属 *Camellia* ツバキ科

小型でやや角張った道管が単独ないし2~3個複合して散在する散孔材である。道管の径は緩やかに減少する。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は8~30本ぐらいである。放射組織は異性放射組織型で1~3細胞幅である。直立細胞には大きく影れているものがあり、結晶細胞が見られる。

以上の特徴からツバキ属に同定される。ツバキ属にはヤブツバキ、サザンカなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、通常高さ5~10m、径20~30cmである。

ヒサカキ属 *Eurya* ツバキ科

小型で角張った道管がほぼ単独で密に散在する散孔材である。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く60を越えて観察される。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる異性放射組織型で1~3細胞幅であり、多列部と比べて単列部が長い。

以上の特徴からヒサカキ属に同定される。ヒサカキ属にはヒサカキ、ハマヒサカキなどがあり、本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の小高木で、通常高さ10m、径30cmである。

4 所見

鹿児島城跡（犬追物馬場・火除地）から出土した木製品（10点）について樹種同定を行った。その結果、マツ属複維管束東亜属1点、スギ1点、ヒノキ2点、タブノキ属2点、サクラ属1点、アワブキ属1点、ツバキ属1点、ヒサカキ属1点が同定された。

杭（No.1~No.7）では、マツ属複維管束東亜属、タブノキ属、サクラ属、アワブキ属、ツバキ属、ヒサカキ属が同定された。マツ属複維管束東亜属（クロマツ、アカマツ）は重硬で腐りにくく、タブノキ属は油分が多く水湿に強い。いずれも耐朽・耐湿性に優れた材で、水湿の影響のある部分や船材などに利用される。サクラ属の材は堅硬、アワブキ属は強き中庸、ツバキ属は強靱であり、いずれも耐朽・耐湿性がある。ヒサカキ属の材は概して強き中庸で、サカキの代用として用いられることがあり、サクラ属、アワブキ属とともに杭などの棒状の木製品にも利用される。

木製品（部材：No.8~No.10）では、スギ、ヒノキが同定された。スギとヒノキは、木理通直で加工・工作が容易であり、とくにヒノキは肌目が緻密で耐朽性・耐湿性が高い良材であり、いずれの樹種も、建築をはじめ板材や小さな器具類に至るまで幅広く利用される。

文献

- 伊東隆夫・山田昌久（2012）木の考古学。出土木製品用材データベース。海青社、449p.
- 島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司（1985）木材の構造。文永堂出版、290p.
- 島地 謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧。雄山 閣、296p.
- 山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成—用材から見た人間・植物関係史。植生史研究特別1号。植生史研究会、242p.

第V章 総括

第1節 調査の成果

1 中世の成果

中世相当層と考えられるⅦ層からは木製杭が出土した。出土した杭は自然の枝を先端のみ加工しており、平成29年度調査のⅦ層から出土した杭列と長さや太さも類似していた(1・2)。樹種も同じくマツ属であったことや年代測定の結果から中世相当の一連の杭であったと想定される。また、これらは湧水砂層(標高約2.8m)に打たれた杭であり、Ⅶ層が湧水砂層で地盤的に脆弱な層であったことから、粗梁のような役割をもった杭列であった可能性が高いと考えられる。

この時期は鹿兒島城築城以前であり、築城以前は湧水する砂層が広がる低地形であったと考えられる。

なお、中世相当層で出土した遺物はこの杭のみであったが、上層(Ⅰ～Ⅳ層)では中世の貿易陶磁器(青磁・白磁・青花・陶器等)も多く、一部は二次焼成を受けたものが多い傾向にあった。

2 近世の成果

近世相当層は標高約3.0m～3.2mに堆積するⅢ～Ⅵ層である。後世の擾乱等で調査箇所によっては残存していない部分もあったが、いずれの層も調査区全域に堆積していた面であった。調査区内で地形的な勾配はなく、おおむね平坦に堆積していたことが確認された。

Ⅲ層は海砂のような砂層が幾重にも堆積した層であった。遺構は検出されておらず、遺物は瓦などが少量確認された。元禄大火以降の明地(火除地)段階の層と考え

られる。

Ⅳ層はⅢ層にバックされた造成面であり、約20cmの堆積が確認された。本層からは、近世相当の遺構が多く検出されたが、遺構の形状や大きさは様々でその性格については不明なものが多い。埋土が灰褐色粘質土を主体とする断面台形状の溝状の遺構については、H29年の調査でも類似するものが多く検出されていることから(SX1～SX12)、Ⅳ層面の遺構の広がりが確認された。

この層はH29年度の調査では、焼土や炭化物を多く含む元禄の大火の処理層に相当すると考えられていたが、本調査区では明瞭な焼土や炭化物が確認されていない。

しかしながら、始良・加治木系陶器(山元窯・元立院窯・初期龍門司窯)や堂平窯系陶器、肥前系時期(初期伊万里)、中国陶磁器など17世紀後半～18世紀前半段階の遺物の出土が多く、それらが二次焼成を受けているものが多く散見されたことや鹿兒島城跡の大型の瓦(軒丸・軒平・海鼠瓦・堀瓦など)が多く含まれていること、それらを大量に破棄したと思われる廃棄土坑(SD11)が検出されていることから、やはりⅣ層は火災処理層に相当すると考えられる。またこの処理層を整地したものが正徳3(1713)年に設置された明地(火除地)に相当するものと推定される。

Ⅴ・Ⅵ層も硬質で平坦な面だが、Ⅳ層とは異なり、遺構が検出されないこと、遺物がごく少量であったことから、遺構のような掘り込みをもたず、人工的な改変がされていない造成面であったことが確認された。

またⅥ・Ⅶ層から五角形に面取りされた木製杭(4・



第72図 高等学校校舎復元図(上町線々路平面図(鹿兒島交通局蔵)参考)
(左:女子高等学校校舎, 右:高等学校校舎)

5)が出土しており、年代測定の結果から16世紀～17世紀代であることが確認されている。

これらは、H29年度調査のSD1で出土した杭列の杭と形状や年代が類似していることから、一連のものを考えられる(鹿理セ2021)。このSD1の杭は犬追物馬場の杭列の可能性が高く、遺構等の掘り込みをもたない面であったことは馬場としての整備された面と考えられる。

このことから、V・VI層は鹿児島城築城時造成面もしくは犬追物馬場の面であったと想定される(杭や馬場については後に詳述)。

以上をまとめるとIV～VI層は前述したように①IV層は元禄の大火の処理層かつ明地に造成した際の面であること、②V・VI層で検出された杭列が元禄大火以前にあったとされる犬追物馬場に関連する柵列の可能性が高いことが明らかとなった。

近世層が良好に残存していたのは、築城時に設置されたと考えられる犬追物馬場として利用された以降、空地(火除地・下馬所)から明治期の練兵場、高等学校校舎が設置されるまで、恒常的な建物が長期に渡り建てられなかったことが一因と考えられる。

鹿児島城築城から高等学校設置までの約290年間に渡り、建物が建たない土地であったことが考古学的な調査成果からも明らかとなり、現存する鹿児島城下絵図等との整合性が確認された。

また、近世の包含層が良好に残存していたことで、鹿児島城本丸正面の区画の利用変遷が考古学的に重層的に明らかにできたことは大きな成果である。

3 近代の成果

近代相当層はII層で、焼土・炭化物・漆喰を多く含んだ硬質層であった。II層では凝灰岩の地業やモルタル製排水溝等が検出された。焼土・炭化物を含んだ層はIV層と同様火災による処理層の可能性が考えられる。

II層下面(IIb層)では、二次焼成を受けた18世紀後半以降の遺物が多く出土している点や鹿児島城の瓦と考えられる大型の瓦片や陶磁器等が出土していることから、明治6(1873)年の鹿児島城本丸・御楼門が焼失した火災の際の処理層(造成層)と想定される。

この造成面は当初練兵場として利用されたが、明治6年の鎮西鎮台第二分営の火災以降、牧場として使用された後、明治10(1877)年の西南戦争の戦場となった。戦後は競馬場が設置され、明治27(1894)年に高等学校が設置されたが、II層上面(IIa層)は、その高等学校校建設時の造成面と想定される。

検出された凝灰岩の栗石含む溝や地業、モルタルの排水溝等は校舎の基礎・付随する構造と考えられる。

なお、本調査区は女子高等学校の校舎と高等学校の境が位置していたことが、古写真・地図や校舎見取り図等から分かっており、それに相当する基礎等の位置が確認された(第72図)。



第73図 鹿児島城跡(犬追物馬場・火除地)出土
加治木・始良系陶器(鹿理セ2021)

またII層からは学校関連の遺物も多く出土している。

第2節 遺物

1 近世遺物(陶磁器・瓦)

擾乱が多く、遺構内・包含層出土遺物の一括性が良好とはいえないが、IV～VI層では、17世紀後半～18世紀代の遺物が多い傾向があった。

陶磁器については、II層では肥前系陶磁器や虫文や格子文をもつ薩摩磁器、加治木・始良系陶器(龍門司窯)等が18世紀代のもので近代遺物が混在して出土した。

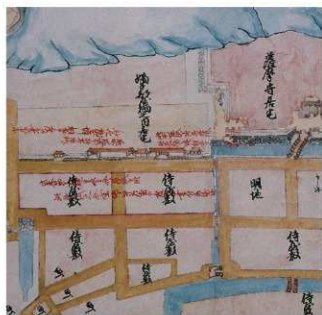
IV層には擾乱などで18世紀代の遺物も混在するが、17世紀後半～18世紀前半の二次焼成を受けた山元窯・元立窯・初期龍門司窯(加治木・始良系陶器)、堂平窯系陶器(薩摩焼)や中世の中国陶磁器などが多い。

本遺跡の特徴として、初期の始良・加治木系陶器(山元窯・元立窯・初期龍門司窯)が多い傾向にあり、H29年度度の調査でも多く出土している(第73図)。

初期の始良・加治木系陶器が消費地遺跡だとまとまって出土する事例は、本県ではなく陶磁器の流通を示す好例といえる。

瓦は、幾何学文のタタキをもつ朝鮮系瓦や陶器瓦等の古相の瓦の出土がみられた。朝鮮系と考えられる軒丸瓦(149)は鹿児島城内では初例である。また、連珠五葉文の軒丸瓦(148)はH29年度調査で2点出土が確認されており、本遺跡での出土例のみの瓦である。類似等を今後検討していく必要がある。

IV層出土の丸瓦は凹面に切り離し痕(コビキB:



第74図 火除地の設置

(赤囲い部分が火除地として幕府に願い出た区画)
正徳3 (1714)年「正徳三年御城下絵図」(部分)
(鹿児島県立図書館所蔵)



第75図 火見櫓の設置

(下町(現在の呉取町付近)に設置された火見櫓)
「天保14年鹿児島城下絵図」(玉里島津家資料)(部分)
(鹿児島県歴史・美術センター黎明館所蔵)

(48・56・58など))をもつものもあり、玉縁長もやや長く、内面の縁辺部の面取りを斜めにする(断面三角形形状)特徴が見られる。軒平瓦では18世紀以降の軒棧瓦も乱瓦の影響で混在するが、長崎瓦の可能性が高い細線の上向三葉文の軒平瓦(38)もあり、17世紀後半～18世紀前半の瓦も散見される。

また、平瓦もスタンプ文をもつものや大型の軒丸(巴文・牡丹文)や軒平瓦、鳥伏間瓦・塀瓦・海鼠瓦など鹿児島城本丸・御楼門の大型瓦も多く出土している。

これらは本丸など他の建物等のものが寄せ集まり、廃棄されたような出土状況であった。二次焼成を受けた遺物も多く、古相の遺物も散見される傾向にあることから、火災処理の土地として利用されたことが出土状況から読み解くことができる。

V・VI層では、本来犬追物馬場として管理されていたと考えられ、遺物の出土が極めて少ない傾向にあった。馬場として利用されていたならば、地表面には多くの欠片などがあつたと考えにくく、遺物の出土がないことはこれを裏付けるものである。

2 近代・近現代遺物

I・II層上面で出土している筆洗やパレット・硯・インク瓶などは、高等小学校関連の遺物である。筆洗や硯の底面には墨書や線刻で組や氏名が記載されている。このような遺物は、鹿児島師範学校(男子部)・付属小学校跡(武遺跡J地点)でも同様な遺物が出土している(学校は明治43(1910)年に山下町(現県民交流センター敷地)から武に移転)(鹿児島市2021)。

学校関連の遺物の中でも、女子高等小学校に伴う遺物

として骨製の和敷のへらが出土していることが興味深い。明治後期にかけて山下町一帯が多くの教育機関が立ち並び教育の中心地となったことを示す重要な資料である。

第3節 火除地・明地(空地)

1 火除地の設置

前述した調査成果と文献との対応から、IV層が元禄の大火の処理層の可能性を示した。

元禄の大火による被災状況は大きく、元禄9(1696)年5月には大火による石垣の築直し、樓門の新築、堀、橋の作事が幕府に願い出て許可され、そこから約10年かけて修繕作業を行い、宝永4(1707)年に鹿児島(鶴丸)本丸再建工事終了し、御座所を御下屋敷より本丸へ移している。

この火災により本丸・二之丸前の敷地は、屋敷群が大きな被害を受けたため、正徳3(1713)年には火除けのため、家来屋敷の建て直しを願い出ている。

この願い出により、二之丸前の下屋敷を召し上げて他に屋敷を移設させ、明地とし火除地としての役割を持たせ、杉・松・杉・檜等を植栽したとされる(第74図)。

犬追物馬場であった方形区画も馬場は撤廃され、明地となっていることから、隣地の旧下屋敷跡同様に火除地の役割をもつ土地であったと考えられる。

火除地として設定された二之丸前の旧下屋敷の明地だが、安永2(1773)年には聖堂・講堂・医学院・造士館・演武館の創設により再開発が行われたことにより、火除地としての役割を終えている。開発が行われなかった旧犬追物馬場の明地のみが、その機能を担う敷地となったと考えられる。

III層の調査では砂層で、遺構等が確認されなかったこ

とからも鹿兒島城存城期は恒常的な建物を建てない土地として利用されていたことが調査成果でも明らかになっている。

2 城下における防災

第2章でも述べたが、鹿兒島城存城時は城下町の火災は切り離せない災害であった(第1表)。下町や上町での火災は周りへの焼焼が多く、被害も大きかった。

特に延宝8(1680)年の田尻火事や元禄9(1696)年の大火は被害も甚大であった。元禄の大火は上町から鹿兒島城まで焼焼し、城の修繕に10年を費やした。

このため元禄の大火以降、城下の防災のため城内・城下町の区画整理を行い、二之丸前の屋敷地のほか城下に広小路や松などの植栽で火除地を設け、城下の防火対策を行うこととした。

しかしながら、城下も敷地が狭く、江戸のように広い空地を多く設けて火除地とすることができないため、城下の各所や屋敷内などに火ノ見櫓等を設置し、火立番を配置することで火災の早急な発見に務めた。

『天保14年鹿兒島城下絵図』には、下町では呉服町や日置島津家屋敷に、上町では車町や重富島津家屋敷に火ノ見櫓を設置されていることが分かる(第75図)。火ノ見櫓は鹿兒島城への焼焼が食い止められるような配置で各町に櫓が設置され、各町で防火対策が行われていた。

度重なる大火による影響から城内・城下町の防火対策が行ったことで、近世期においては元禄以降、鹿兒島城まで焼焼するような甚大な火災はなかったようである。

城や城下町の構造は、火災のよる災害の影響もよく見られることから、鹿兒島城・城下町の機能や役割の変遷を考える上で、切り離せない事象であるといえる。

第4節 犬追物馬場

1 犬追物

笠懸・流籠馬とあわせて「騎射三物」といわれ、鎌倉時代以降に武士の鍛錬として行われた馬術武芸である。馬場内に犬を放ち、その犬を馬上より射手が射ることで、実践的な馬術・弓術の修練としたものである(第76図)。

固定された的を得る笠懸・流籠馬とは異なり、走り回る犬を馬上から射る犬追物は「古事類苑 武技部」では「騎射中ニ於テ、最モ能クシ難キモノ」とされた。

技術の難易度も高く、ルールも複雑で一度開催するには馬場や棧敷等の設営、犬の確保などで莫大な費用が必要なものであった。

鎌倉～室町時代にかけて、武士たちが盛んに行ったが、費用の問題やルールの複雑さから「足利氏ノ末、漸ク衰替シテ其法ヲ失ヒシ」といわれ、室町末期には一度衰退した(『古事類苑 武技部』)。

南北朝期以降に再び盛んになるが、戦国時代になると鉄砲伝来により、戦法が馬術よりも砲術に変化したこと

もあり、日々の弓馬修練としてではなく、武士儀式的意味合いが強くなり、「儀式としての作法・故実」が重視され、故実作法も伊勢家や小笠原家など様々な流派が知られるようになった。

2 犬追物のルール

犬追物は、当初鎌倉時代には弓馬鍛錬として行われており、射手や犬の数は決まりはなく、規定に縛られていなかったが(『山名家犬追物記』)、戦国時代には武芸儀礼の作法として規定が重視されるようになった。

『古事類苑 武技部』では本式作法としてのルールが記されている。馬場七十杖(約160m)四方の馬場を周囲を垣で囲い、勝示とする。内中央に大縄(直径四杖)、小縄(直径一杖)の2重の円を設置する。大縄外周には幅一杖半ほどの色紗をまき、けずり際とした。

射手は三十六騎、十二騎ごと上手・中手・下手に分かれて競い、矢には犬を殺傷しないように犬射番目という箭矢(射手一人につき十六筋を四つに分けてくったもの一くくり)が使われる。

競技には様々な役をもつものがおり、犬追物故実に精通したものが努めた審判役の検見は射撃の優劣を決める最も重要な役であった。その他当り矢があった判定を日記役に告げる喚次、記録係の日記役、犬を小縄から放つ犬放、犬を小縄まで連れていく犬曳等の多く役回りがおり、射手奉行・犬奉行によって競技全体を仕切られた。

射手は十二騎ずつけずり際に並び、小縄から一匹ずつ放たれる犬を射るが、一匹目は見逃し、二匹目から四匹までは人員で射る。ここまでは小縄の外にいた犬は追わず、五匹目以降は大縄で射たとしても、縄外に逃して四騎でこれを追い射る(外の犬)。残り八騎はそのまま大縄まわりに留まり、順番に四騎ずつ十四目まで外の犬を射る。これを十五回行うのを本式手組とする。

三十六騎三手の場合、的となる犬も一回の手組で十四匹放つため、一度の張行で150匹の犬が必要であった(『犬追物図説』)。

鎌倉期と室町・戦国期や流派、規模によって仔細は異なる場合もあるが、以上が基本的な規定である。

3 島津家と犬追物

島津氏は鎌倉時代から明治時代まで犬追物を継続した稀有な武家である(第23表)。戦国時代に衰退した後、島津家のみ江戸時代も行い続けたことで、犬追物は島津家の御家芸をして知られるようになった。島津家の犬追物関係史料は「島津家文書」(東京大学史料編纂所蔵)、「犬追物関連資料(島津家伝来)」(尚古集成館蔵)に多く残っており、いずれも国宝・重要文化財に指定されている。

鎌倉時代の「吾妻鑑」には承久4(1222)年に2代忠時や5代師久の犬追物に関連する記録はあるが、最も古い張行の記録は至徳元(1384)年の島津氏久・伊久



第76図 王子ヶ原射手立之図 (光久公御筆大横物) (尚古集成館蔵)

の張行まで遡る(『薩藩旧記録録』『島津国史』)。

室町時代には応永2(1395)年に7代島津元久や応永23(1416)年に8代久豊が張行し、それ以降も9代忠國、10代立久、11代忠昌、12代忠治、13代忠隆らによって盛んに張行された。

戦国期には、天正2(1575)年に16代義久が島津家弓馬師範である川上十郎左衛門経久に犬追物の秘説を受けており、天正3～5(1575～1577)年には義久や17代義弘、島津歳久らが張行しており、天正4(1576)年には薩摩へ下向した近衛前久の台覧で犬追物を行っている。

しかしながら、天正5(1577)年11月に義久が行った以降、朝鮮出兵等もあり、慶長11(1606)年の18代家久の張行まで一度途絶えている。

島津家は犬追物故実家・弓術師範役の川上十郎左衛門家が室町時代から熱心に故実を整備に努めたこともあり、江戸期になっても存続することができた。

江戸時代では、18代家久は犬追物への関心が高く、慶長14(1609)年・元和4(1618)年に京都小笠原家から故実を伝授されている。

慶長11(1606)年には、家久の藩主代替の際に行う慶事として「家久様御代始犬追物張行」が3日間(11月25～27日)張行された(同年、家康から編諱を受け、忠恒から家久と名乗った)。鹿児島城が築城された直後の大規模な張行であったことから、鹿児島城本丸前の馬場で行われたと考えられる。また家久は、元和7(1621)年に嫡子虎寿丸(後の19代光久)のために犬

追物を張行し、自ら検見を努めている。

19代光久は正保3(1646)に江戸の芝邸にて張行し、翌年正保4(1647)年に武蔵国王子原で將軍徳川家光の台覧で犬追物を披露している。これ以降、島津の御家芸として知られるようになった。

しかし光久以降は、20代綱貴が天和元(1681)年に嫡子菊三郎(後の21代吉貴)のために張行した行った後途絶えてしまった。この原因としては天和2(1682)の生類憐れみの令があると言われるほか、武芸の主流が馬術から舞術に関心が移ったことも要因であるとされる(松尾1990)。

犬追物への関心がなくなる中、犬追物故実は川上十郎左衛門家や新納又左衛門らによってかろうじて伝承された。また、吉貴の命で二十名ほどが毎日犬追物の稽古をしていたが、23代宗信の代には沙汰もなく、宗信が急死したことが『薩陽落穂集』には記されており、一度1740年前後には鎌倉から続いた犬追物は完全に途絶えてしまったようである(松尾ibid)。

その後、安永2(1773)年に25代島津重豪が二之丸前の火除地とした区画の再開発を行い、藩校の造士館・演武館など学術施設を開設した。その演武館内に犬追物稽古場を創設し、犬追物の再興を試みた。

安永4(1775)年には演武館内の馬場で張行されたが、この際には既に故実に精通する者はいなく、多くは口伝であったことから、絵図や故実書をもとに再興されたものであったこともあり、満足いくものではなかった



第77図 犬追物装束の武士



右：島津忠義（尚古集成館蔵）



第78図 犬追物の犬（尚古集成館蔵）

ようである（松尾1990）。再興された犬追物は、幕末まで演武館で行われ、稽古が日々行われた。

重豪・斉宣・斉興・斉彬までは当主は見学のみであったが、29代忠義は犬追物に非常に関心を持ち、自ら射手として参加している。忠義は、明治12（1879）・14（1881）年に2度も明治天皇の前で張行した（於東京吹上御苑・麻布島津邸）（第77・78図）。

また、明治24（1891）年には、鹿児島を訪れたロシア皇太子ニコライ二世に犬追物を披露したことを最後に、明治30（1897）年に忠義が没すると犬追物は催されなくなり、完全に途絶えてしまった。

4 馬場の規模

犬追物の馬場の規模は、流派や規模によって異なるが、弓杖（弓の長さ約2.27m）を一単位とする。関連する故実には規定される馬場の規模が記されている（第24表）。

前述した『古事類苑』では本式馬場は七十杖（約160m）四方の馬場が必要とされ、大規模なものでは『犬追物興行之覚』で八十三杖（約188m）四方とされている。

島津光久の張行を記した絵図・史料では、正保3（1646）年の芝邸での犬追物張行では、六十間（約109m）×四十間（約72.8m）、正保4（1674）年の徳川家光上覧の王子原の張行では、北に棧敷を構え、東西

第23表 近世・近代における薩摩藩の主な犬道物流行

松尾(1990)を引用・改変

年号	射手・出来事	藩主	発行・関連絵図	参考資料	
慶長2	1597	家久	家久殿御始(繪図あり)		
慶長11	1606	家久	家久様御始犬道物	日記雑録278~304「家久公御譜中」	
					11.25 家久ら十二騎
					11.26 家久ら十騎 11.27 島津又吉ら十騎
慶長12	1608	8.27 家久ら十騎		日記雑録390「正文在加治木新納仲左衛門」	
慶長13	1609	11.17 家久ら十二騎		日記雑録517「家久公御譜中」	
元和7	1621	家久	虎御丸已六歳。故家久爲行犬道物自努検見…	日記雑録1755~1758「家久公御譜中」ほか	
					12.4 虎御丸(光久)ら十二騎
					12.5 市来掃部助ら十騎 12.7 額峯長十郎ら十二騎
寛永20	1643	家久	光久様御始之犬道物	日記雑録338~340「光久公御譜中」	
					9.15 島津忠平ら十二騎 9.16 島津忠弘ら十二騎
寛永21	1644	3.13 光久ら八騎		日記雑録386「光久公御譜中」	
正保3	1646	4.7 川上久運ら十二騎		日記雑録17「川上十郎左衛門久慶譜中」	
正保4	1647	家久	芝原座にて 光久公御始大横物三編 ①「俗伝薩摩藩御始犬道物」 王子屋にて徳川家光上覧 「島津犬道記」(犬道物御覽記) 光久公御始大横物三編 ②「王子ヶ原御始手之圖」 ③「犬道場之図説」	「日記雑録」 64「光久公御譜中」 65「正文在文庫」 183「犬道物御覽記」	
					11.13 島津謙右衛門ら十二騎
					慶安元
寛文10	1670	家久	「犬道物馬場」記載あり 馬場の圍い記載あり	狩野常信(1636~1713)	
					天和元
天和2	1682	生類殺めみの令			
元禄9	1696	4.23 元禄の大火			
宝永6	1709	生類殺めみの令中止			
正徳3	1713	二之丸前に火障地を設置			
安永2	1773	通士館・演武館新設			
安永4	1775	11.13 島津又六郎ら十一騎	重豪 神事犬道物(演武館)	犬道物文書N0.六「御再興之犬道物伝相8道 之条々改定」 島津家文書24-23-4「犬道物譜古手組」 松尾(1990)	
					寛政5
寛政9	1797	12.15 ?	齊宣	齊宣臨観のため(演武館)	
文化12	1815	12.6 島津又六郎ら十一騎	齊興	神事犬道物	
天保3年	1832	4.1 島津又六郎ら十一騎	齊興	神事犬道物 神事犬道物御始之事 犬道物流行名書(天保三年) 玉里島津家 資料(資料館蔵)	
明治12	1879	11.27 忠義ら八騎		神事犬道物 明治天皇天覧、吹上焚免にて	
明治14	1881	5.9 忠義ら三組		明治天皇天覧、麻布島津座にて	
明治23	1891	5.6 忠義ら		ロシア皇太子ニコライ二世御覽、鹿児島砲場にて	

四十二間×南北四十間(約76m×73m)の馬場を設けている(第79~83図)。

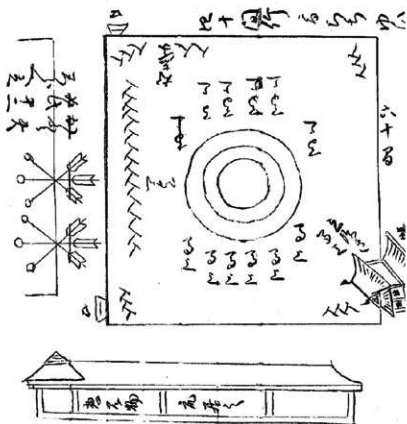
また、後世のものになるが島津家の犬道物故実をまとめた「松平豊後守齊宣家伝来犬道物太概」(尚古集成館所蔵)では、馬場は「堅40丈(約80m)、横42丈(92.4m)、良に棧敷を構、是を堅と言う、其所に忠し丈間定の故実あり」と記されている(松尾1988)。

鹿児島城本丸前の犬道物馬場を記した絵図では、犬道物馬場を囲う杭の表現がみられる。鹿児島城御樓門前の敷地は、「常信筆薩摩御城下ノ景」(巻頭図版)では御樓門構の前から欄が見られ、「見聞秘記付図」では本丸と二之丸境の堀を境(現検察庁・名山小学校の境)の北側と欄が描かれている。

寛文10年「薩摩御城下絵図」では、やや二之丸前寄りの敷地に欄が描かれているが、当時の地割では、その敷地には侍屋敷(喜入氏他屋敷)があった区画であり、本来は北側の区画に犬道物馬場があったと想定される。

第24表 故実等による馬場の規模

故実・絵図	馬場の広さ		
	縦	横	備考
古事類苑 武技部犬道物	七十杖	七十杖	七十杖四方
犬道物興行之覽	八十三杖	八十三杖	—
犬道物之覽書	七十二間	七十二間	七十二間四方
	南北四十一間	東西四十六間	略の場合
犬道物図説	七十杖	七十杖	七十杖四方也
犬道物類編	七十三杖	七十三杖	七十三杖四方
犬道物図	九十八間	九十八間	軍馬之陣馬場
	六十六間 或六十間	六十六間 或六十間	小犬道物馬場
正保日記 第79図	六十間	四十間	光久 芝原奉行
犬道物御覽記 第81図 鹿児島県立図書館ほか	南北 四十間	東西 四十二間	光久 王子塚奉行
	尚古集成館蔵 四十二間	四十二間	四十二間四方
松平豊後守齊宣家伝来犬道物太概 尚古集成館蔵	四十杖	四十二杖	



第79図 正保日記（正保3（1646）年芝部における犬追物馬場）（東京大学資料編纂所蔵）

<https://cloing.h.u-tokyo.ac.jp/viewer/image/data/T38/1646/206-1/4/0003.tif>

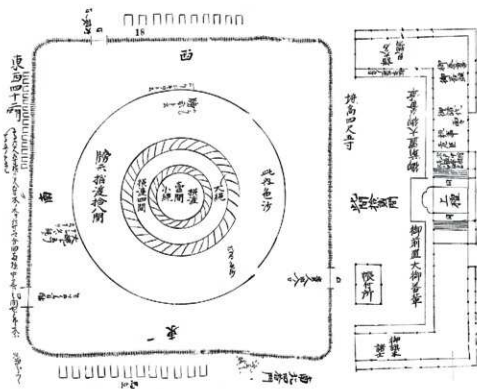
大樹（宗光）之百敷二冊平宣以、執政二因之伺奉、正保三年四月七日先幕府之執政及御本之大名小
名於芝宅地前、行一組之犬追物矣、之試觀セシム、余謂希代之壯觀也矣、「田記」

七日、癸未、島津光久御邸に、犬追物を演ず、「正保日記」

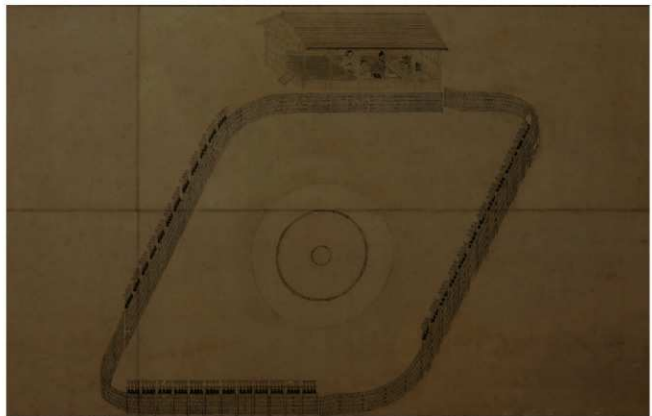


第80図 桜田御邸射手立之図（光久公御筆大横物）（尚古集成館蔵）

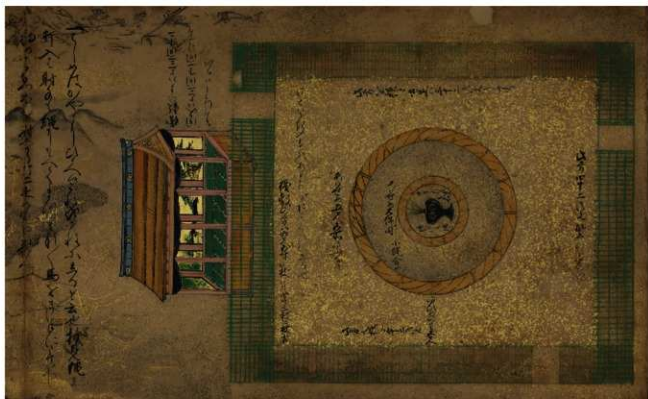
棧敷八脚亭之南にあり、東西四十六間、南北一十二間、南中央に上段をかまへて御座所とす、棧敷之南十二間を隔て馬場有、其廣す東西四拾二間、南北四十間也、四方徑行を以て馬をゆふ、母之高四尺五寸、地之高下に依て五尺も有けるとなん、埒之中央四方十八間に色ノ砂をまきて馬を立る所とす、是を勝宗と云、其廻りを勝宗之繩と云、其中央に長寸十八尋餘之繩を以、方四五間計之圓をなす、是を大繩と云、其圓之中央に長寸五尋餘之繩を以、方二間計之圓をなす、是を小繩と申す、其内に砂を入れ滿る事繩二ひとし、埒之埒之方二戸有、是を大埒之口と云、別之方二戸有、これを物かけ之口と云、埒横つりかた取成へし、又南と東と西との埒の上にかきりの繩平之矢をさしほさむ、一方二十二桁也、一桁毎に四桁にして四所に掛れ八十六節也、十二桁二合て百九十二節成へし、三方合て矢五百七十六節也、是三手之大埒物之矢數なん。



第81図 『犬追記(犬追物御覧記)』(正保4(1647)年王子原張行) (鹿児島県立図書館所蔵)



第82図 犬馬場之図(光久公御筆大横物) (尚古集成館蔵)



第83図 犬道物園 (部分) (高古集成館蔵)

また、前述した故実通り本式の馬場の広さはこの区画には大きすぎるため、光久の銀行記録のようにやや縮小した馬場で設置されたと考えられる。

以上のことから、鹿児島城前の犬道物馬場の区画自体は幅約150mに近くあったと考えられる。競技としての馬場の規模としては、光久の銀行や江戸前期の史料から約70m四方の馬場があった可能性が高いと考えられる(後に詳述)。

5 馬場の囲い・柵

犬道物馬場は竹垣に囲まれ、3か所の明戸(射手や犬の出入口)が設けられた。

第83図の『犬道物園』では緑色の竹と思われる柵(竹垣)で囲われている。第82図の『犬馬場之図』では太い杭(竹か)の間に縦方向に竹を並べる建仁寺垣のようになっており、その上には使用する飾り簷目が飾られている。『犬道物馬場図』(第84図)では、竹柵で囲われていることが見て取れる。

柵の高さは『犬道物御覽記』によれば、「垣高四尺五寸(高さ1.3m)」、杭の長さ六尺五寸(1.9m)、横一尺五寸(50cm)、太さ六寸四分(6.4cm)と記されている。第77図の古写真を見ると、竹垣の下は土塀がみれ、馬場が周りより一段低くなっており、竹垣の高さが160cm以上(馬引きの男性を155cmを仮定した場合)であったと想定される。さらに、馬場の内柵をみるためには相應の高さが必要のため、棧敷は2階建てになっており、故実の絵図と同様であることが分かる。



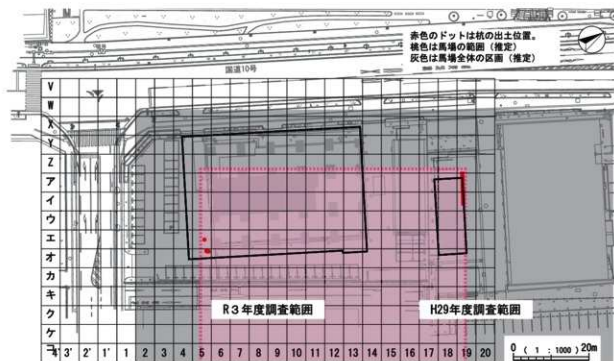
第84図 馬場の竹垣

『犬道物馬場図』島津家文書(東京大学史料編纂所蔵)
島津家文書-49-5-1

H29年度のVI層で検出された杭列は、杭間が約50cm、太さが約5cmで、先端が欠損していたため全長は不明だが、最も良好に残存していたものは110cmあったことから、全長はより長かったと想定される(第89～93図: H29年度未掲載を含む出土杭をすべて図化。杭は先が焼けて炭化しており、炭化した部分は元祿の大火で焼けたものと考えられる。)

出土した杭は六角形に面取りしており、本調査でVI・VII層で出土した杭も樹種に違いはあるが、同じような規格で加工しており、年代測定の結果からも同時期であることが明らかになったことから、H29年度の杭列の一連のものであった可能性は非常に高い。

面取りされた杭は建材等の杭とは異なり、装飾性があ



第85図 木製杭出土位置および馬場構想図

り、非常に視覚性が高く、明らかに魅せるための杭であると考えられ、犬追物の馬場の柵として利用されていたものと想定される。

また、馬場を囲う一連の杭列であるならば、H29年度の杭列は北辺、本調査での杭は南辺のものであることから、出土位置から馬場の規模は約70m四方であったと推定される。また、馬場に付随する棧敷は北（北東）に構えることから、馬場の位置から調査区北側に棧敷が設置されたことが推定される。

これにより、考古学的成果と江戸前期の絵図・文献資料が一致すること、犬追物馬場の復元が可能になったことは大きな成果である。

6 馬場の期間

前述した調査成果と文献との対応から、杭列が犬追物の馬場の柵であった可能性が高いと考えられる。

競技上、馬場内には中央に二重の円（大縄・小縄）が設置される以外は何もない状態が通常であるが、調査成果でV・VI層面は遺構は検出されず、遺物の出土も極めて少ないことから平坦の造成面であったことは馬場の本来の状況と一致することから、馬場の整地層であったと考えられる。

この馬場は鹿児島城築城時に整備されたと推測され、藩における一大慶事であった慶長11（1606）年の家久の「御代始犬追物」は、新たに整備したこの馬場で行ったと考えられる。慶長年間以降、光久の御代始や藩主が嫡子のために犬追物を強行しており、藩として強行を行う場であった。

『見聞秘記』には「御代始、慶長年間より正徳之始ま

で此所に有之」とあり、明地として整備される正徳年間まで馬場が設置されていた可能性が考えられる。

また、調査成果からもV層は元禄の大火（1696）の処理層（IV層）にバックされているため、馬場の整地層（V・VI層）の時期は正徳3（1713）年の明地設置までの期間に収まる。

城山（上山城）に麓の屋形（本丸・二之丸）と屋形前の犬追物馬場を設置する構図は中世城館的である。

犬追物を近世期にも継続させているのは薩摩藩しかなく、鹿児島城が中世の伝統を色濃く引き継いだ近世城郭であったことを犬追物馬場から読み解くことができる。

第5節 遺跡の立地と変遷

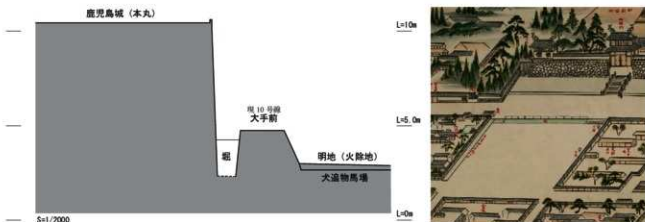
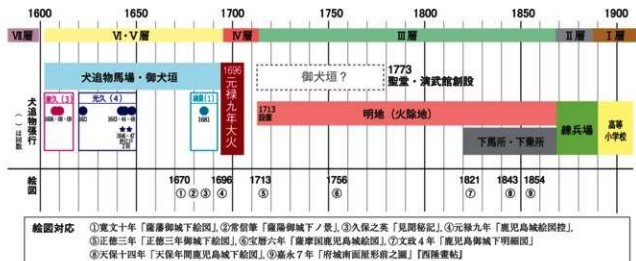
1 立地と役割

本丸との立地と地形を復元すると、第87図のようになる。本丸は標高約11m、大手前約5m、明地約3.2～3.0m、犬追物馬場約2.4～2.8mである。隣接する垂水・宮之城島津屋敷跡の近世建物基礎面は約3m、名山遺跡は石組・知業が約2mである。大手前から斜面状に低くなり、東側に向かって低くなる立地であることが分かる。

本丸から斜面の低い位置に立地していることは、大手前から斜面を犬追物の観覧の場として使用した可能性も考えられる。

また犬追物馬場を撤去後、鹿児島城本丸前の土地を明地（火除地）として近世期存続させている理由は、火除地や下乗場としての役割だけではないと考えられる。

一段低い明地は近世城郭の曲輪にみられる待留のような広場が鹿児島城内では土地が限られているため確保し



づらいことからそれに準ずる役割をもったものとも推測できる。

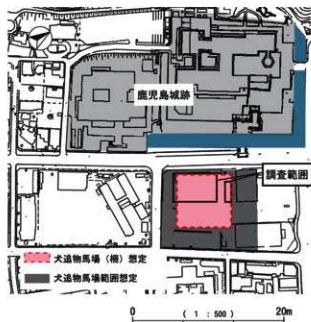
さらに、江戸の火除地は広場を利用して市場や祭りに使用したという記録があることから、城下の広場として様々なことに利用されていたと考えられ、明地だからこそその土地としての機能は多岐に渡った可能性も考える。

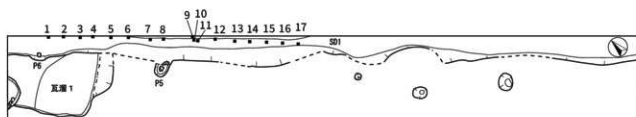
2 遺跡の残存状況

鹿兒島城（犬追物馬場・火除地）は、鹿兒島城内の本丸正面という良好な立地に位置している。本報告書の成果から、犬追物馬場と考えられる欄列が確認されたことで、馬場の復元等が可能となった。また、近世の包含層が確認されたことで、元禄の大火の処理層や鹿兒島城築城以前の中世層の残存等、層的に非常に良好な状態で残存していることが明らかとなった。

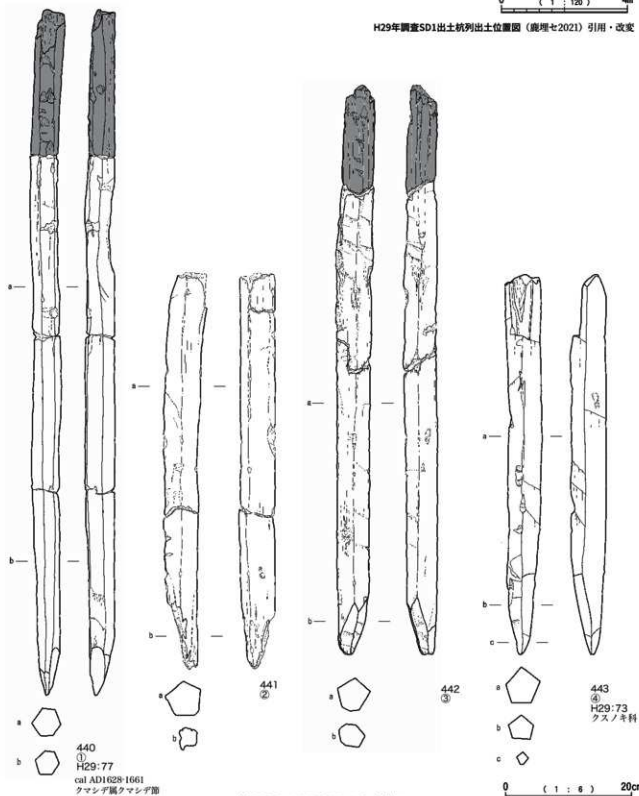
この重層的な成果は、鹿兒島城内の変遷や土地利用等を考える上で重要な成果であるといえよう。

本遺跡周辺は、その周辺は良好な状態で残存している可能性が高く、鹿兒島城内であることを十分に考慮し、今後取り扱いに十分注意する必要がある。

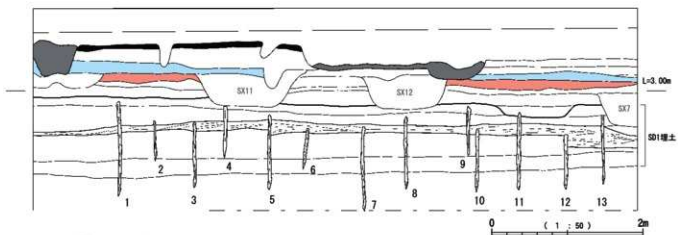




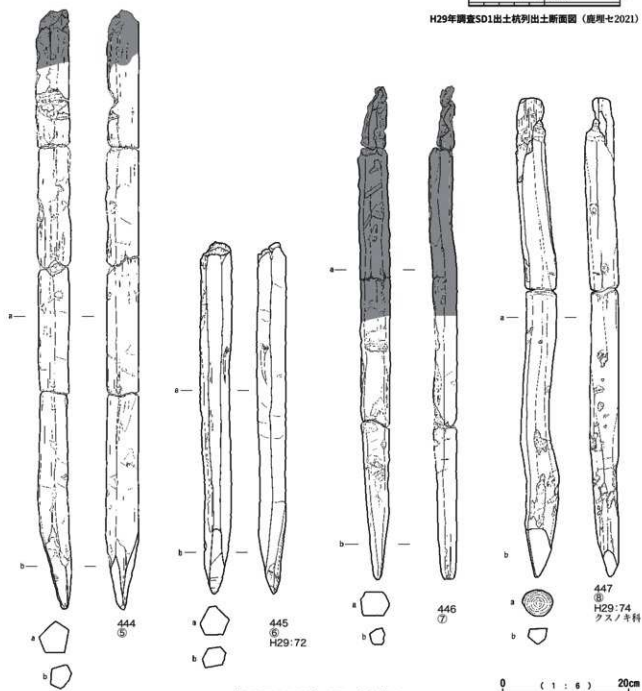
H29年調査SD1出土杭列出土位置圖 (鹿塚セ2021) 引用・改変



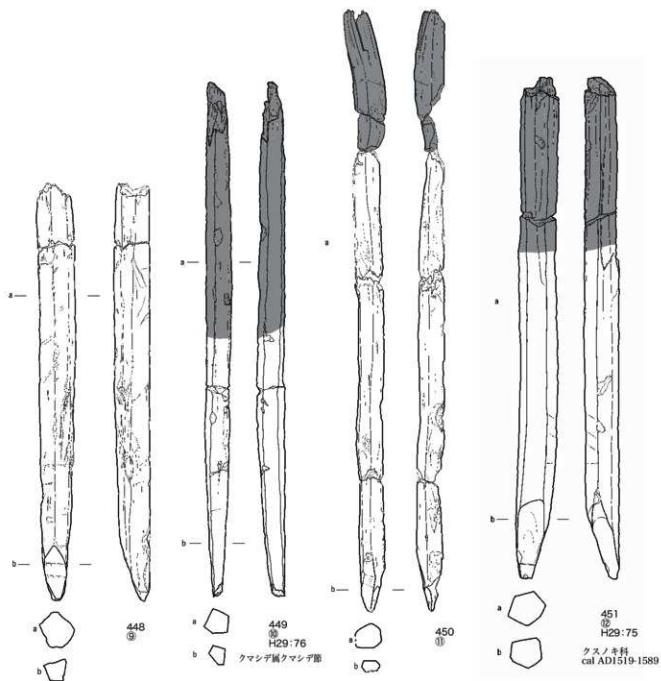
第89図 H29年SD1出土杭1



H29年調査SD1出土杭列出土断面図 (處理セ2021)

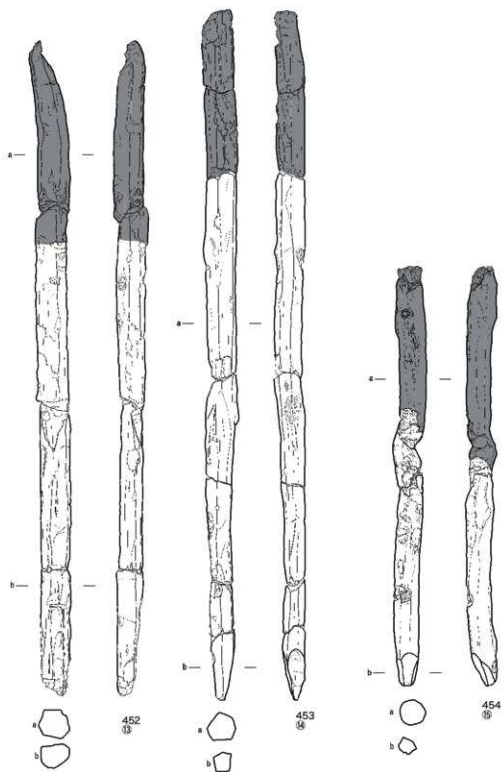


第90図 H29年SD1 出土杭2



第91図 H29年SD1出土杭3

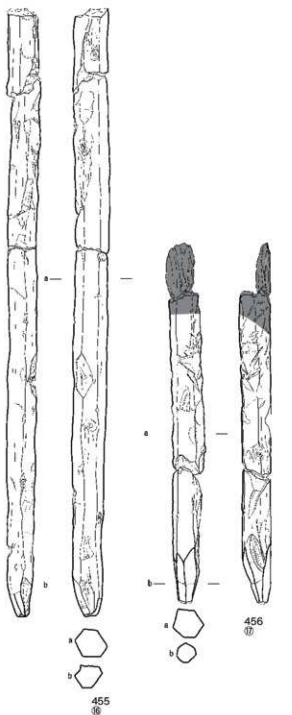
0 (1 : 6) 20cm



第92圖 H29年SD 1 出土杭4

【主要参考文献】

- 始良市教育委員会2019『始良市島津家墓所調査報告書：平成26-30年度市内遺跡発掘調査等事業』
- 始良市誌編さん室2022『始良市史第2巻 中世・近世編』
- 始良町教育委員会1995『元立院宗跡跡跡』始良町埋蔵文化財発掘調査報告書6
- 阿比留士研2022『近世鹿児島城下町についての考察』『鶴文の森から』14, 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 太田寿春2020『鹿児島城の近代』『鹿児島城の城跡』鹿児島歴史・美術センター黎明館
- 鹿児島県1913『鹿児島縣産産史上巻』
- 鹿児島県教育委員会
- 1983『鹿児島(鶴丸)城本丸跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書26
- 1984『鹿児島(鶴丸)城二之丸跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書5
- 1987『鹿児島県の中世山城—中世城跡調査報告書—』鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(43)
- 1990『鹿児島城二之丸跡(遺構編)』鹿児島県教育委員会発掘調査報告書55
- 1992『鹿児島城二之丸跡(遺物編)』鹿児島県教育委員会発掘調査報告書60
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 2003『垂水・宮之城島津家屋敷跡』鹿児島県立埋蔵文化財発掘調査報告書48
- 2020『鹿児島(鶴丸)城跡—御門町周辺—』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
- 2021『鹿児島城跡(犬追物馬場・火除地)』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書211
- 2022a『鹿児島(鶴丸)城跡—北御門、御内側、能登台ほか—』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書214
- 2022b『鹿児島(鶴丸)城跡—総括報告書—』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書215
- 鹿児島県歴史資料センター黎明館
- 2001『鶴丸城石垣修繕事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』鹿児島城跡御内側跡。『黎明館調査研究報告14』
- 2020『鹿児島城の城跡』
- 鹿児島県1955『鹿児島のおいたち』
- 鹿児島市1916『鹿児島市史』
- 鹿児島市教育委員会
- 1984『鹿児島(鶴丸)城二之丸跡』
- 1988『名山道路—屋内運動場建設事業等に伴う第1次〜3次緊急発掘調査報告書—』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書8
- 1992『造土器・漢式陶器』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書13
- 2005『鶴丸城二之丸跡—目土・赤土・陶器跡—』『甲斐川底遺跡—玉江橋下—』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書19
- 2010『名山道路—名小学校校庭発掘事業に伴う第5次埋蔵文化財発掘調査報告書—』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書38
- 2003『鹿児島市埋蔵文化財確認発掘調査報告書—共井公園・琉球館跡—』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書39
- 『鹿児島(鶴丸)城跡調査』鹿児島市教育委員会発掘調査報告書82集
- 2021『武蔵路1地点』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書88
- 鹿児島市史編さん委員会1971『第4巻 近世関係史料 古記』『鹿児島市史第3巻』加治木孝教育委員会1995『山元城跡』加治木孝埋蔵文化財発掘調査報告書1
- 小林哲二2020『近世の鹿児島城下町と城下町』『鹿児島城の城跡』鹿児島歴史・美術センター黎明館
- 五味克夫1988『江戸時代における名山小学校敷地の状況について—文献を中心とした考察—』『名山道路—屋内運動場建設事業等に伴う第1次〜3次緊急発掘調査報告書—』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書8
- 岡明忠2012『野野冷水窯跡出土遺物の追加報告—物原1を中心に—』『鶴文の森から』5, 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 岡明忠2017『野野冷水窯跡出土の白磁器型打ち製品』『中近世陶磁器の考古学』7, 雄山閣
- 鹿児島城跡御門建設協議会『鹿児島県2016『鹿児島(鶴丸)城跡保存活用計画』南風病院女子寮建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1978『野野冷水』東洋社』社団法人鹿児島県共済会南風病院
- 服部英雄2012『大迫物を演じた河原ノ者たち—犬追物馬場の背景—』『河原ノ者・舟人・香子』山川図書出版株式会社
- 福井洋一・美南2020『初公大迫物馬場』
- 松尾千歳1988『資料紹介—熊鷹—大迫物図』『尚古集成創刊要』2, pp.21-34
- 松尾千歳1990『島津家武家放火の成立と展開—犬追物放火を中心として—』『尚古集成創刊要』4, pp.1-20
- 三木浩2014『島津藩の本城としての鹿児島城』『鹿児島国際大学ミュージアム調査研究報告』第11集鹿児島国際大学ミュージアム
- 三木浩2017『古絵図からみた鹿児島城』『鹿児島国際大学考古学ミュージアム調査研究報告』第15集鹿児島国際大学ミュージアム
- 三木浩2019『鹿児島城築城と御門—上山城と鹿児島城の歩み—』『鹿児島国際大学考古学ミュージアム調査研究報告』第18集鹿児島国際大学ミュージアム
- 養田岩太郎(編)1908『鹿児島市街置地遺蹟』吉田文并堂
- 南の鶴文調査室2016『野野冷水窯跡出土の白磁器「型打ち製品」の年代観』『鶴文の森から』9, 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 渡辺芳樹2019『薩摩焼研究の現状と課題』『東洋陶磁学会第46回大会基調講演資料』

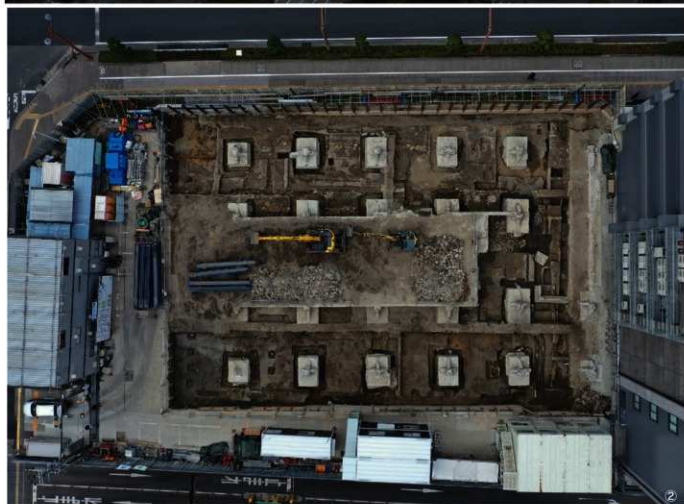


第93図 H29年SD1 出土机5

●本報告書作成においては、鹿児島大学准教授小林仁氏には近世〜近代における鹿児島城下町の変遷等について、尚古集成館館長松尾千歳氏には島津家の犬追物に関する指導・助言を頂いた。

●島津家の犬追物については、松尾(1988・1990)に詳しい。

写 真 图 版



①遺跡全景（写真中心が調査区。手前が鹿児島城跡（左：鹿児島県歴史・美術センター黎明館，右：鹿児島県立図書館）
 ②調査区全景（上が国道10号線）

图版 2



①D001・005 土层断面 ②D001・005 土层断面交差部拡大 ③D006 土层断面 ④D007 土层断面 ⑤D008 土层断面
⑥D005 土层断面 ⑦D0012 土层断面 ⑧D003 土层断面



①



②



③



⑤



④

①D008 土層断面 ②SD003 土層断面 ③～⑤SR001 検出状況



①SR002 検出状況 ②SM00 検出状況 ③SM005・SM006 検出状況 ④SM001・002・003・004・SD001 検出状況
 ⑤II層上面遺構検出状況 (ア～オ-4～6区) ⑥SD001 遺物出土状況 ⑦SX006・007 検出状況



①SX009・P067 ②SX020 遺物出土状況 ③P063 遺物出土状況 ④SD11・SX060 ⑤SD011 遺物出土状況
⑥・⑦SD011 埋土断面



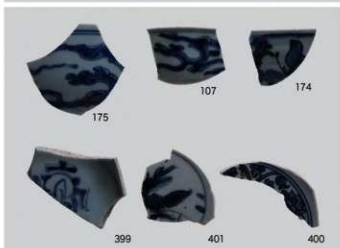
①SX053 ②P016 木製品出土状況 ③ウ〜オー4・5区ビット群完掘状況 ④P020 木製品出土状況 ⑤VI層面ウ〜オー11区調査状況 ⑥SM013 遺物出土状況





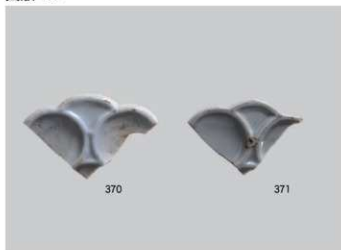
















鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（220）
鹿児島第3合同庁舎整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

鹿児島城跡（犬追物馬場・火除地）2

発行年月日 2023年3月
編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号
TEL 0995-48-5811
印刷 日進印刷株式会社
〒892-0846 鹿児島県鹿児島市加治屋町16-20
TEL 099-222-8291 FAX 099-223-2715



鹿児島県